

獨逸中世の損害賠償制度

——定額賠償制の一研究——

THE SYSTEM OF COMPENSATION IN
MEDIAEVAL GERMANY (A STUDY
OF DEFINITE SCALE OF
COMPENSATION)

助 教 授

金 澤 理 康

ASSIST. PROF. M. KANAZAWA.

1 9 4 0

目 次

緒 言	1
一 總說	6
二 身代金	13
三 贖罪金(其一)	31
四 贖罪金(其二)	45
五 贖罪金(其三)	63
六 罰金	74
結 語	78

獨逸中世の損害賠償制度

——定額賠償制の一研究——

金澤理康

緒言

違法行為の當事者間に於て、今日實損賠償制が採られ、定額賠償制が採られて居らない事は周知の事實である。これは刑法の發達により、違法行為に對する刑罰的役割は刑法によつて果されて居り、損害賠償は唯損害填補の役割のみを果さば足りることゝなつてゐるからである。然しかゝる分化は近世に至つて初めて實現したのであり、それ以前に於ては之と異なる様相を呈してゐた。即ち或場合には刑罰のみを科して損害賠償を認めず、或場合には損害賠償のみを科して刑を加へなかつた。換言すれば、刑罰は損害賠償を吸収し損害賠償は刑罰を吸収したのである(註一)。違法行為に對し主として孰れを科するかは、時代により場所によつて甚だ異つて居り、到底簡単に之を説き去ることは出来ない。

(註一) 日本養老律令に於ては、殺人に於て故意犯ならば死刑其他の刑罰を科するのみであり、損害を賠償せしむることなく、過失犯ならば贓銅を出さしめて之を被害者に給付するのみにて、刑罰を別に加ふることはなかつた(贓盜律、闘訟律、獄令)。

小論に於て扱はんとする獨逸中世の頃に於ても、實刑と損害賠償とは互に押合ひつゝ波狀を成して變遷を遂げてゐること後述の如くであるが、その損害賠償の内に就て之を觀れば、大體に於て定額賠償制をその基準として採用して居ることが窺はれる。中世とは言ふ迄もなく六世紀より十五世紀に亘る永き時代であり、法源としても數々の部族法を初めとして、多くの勅令 (Capitularia) があり、又 Sachsenspiegel を初めとして數々の「法律書」があり、その他都市法も存するのである。今これ等全部に亘つて検討を加へることはかへつて錯雜を來すが故に之を避け、比較的系統を追ふて、レツクス・ザリカ (Pactas Legis Salicae. 略號 Lex Sal.)、その増補 (Novellae. 略號 Nov.)、カール大王によつてフランク人竝にザクセン人に對して發布されたる Capitulatio de partibus Saxoniae (略號 CdpS.) Capitulare Saxonicum (略號 Cap. Sax.) Lex Saxonum (略號 Lex Sax.) の諸法、竝にザクセン・シュピーゲル (Sachsenspiegel-Landrecht u. Lehnrecht. 略號 Ssp.-Landrecht, Ssp.-Lehnrecht) のみに依つて損害賠償制度を説述して見度いと思ふ。

因に叙上の法源の成立の年代を述べれば、Pactus Legis Salicae (Lex Salica) は西暦 507 年乃至 511 年に於て、即ちキリスト教傳播以前に於て、ライン河下流々域に住めるザリ・フランク部族の慣習を寫したものであり、その増補は彼の子竝に孫の頃に行はれたものである。Capitulatio de partibus Saxoniae

は785年頃に於て、暴動の平定者カール大王がキリスト教保護の爲に一方的に定めたる威嚇的立法であり、*Capitulare Saxonicum* は797年にザクセン人參與の下に成れる制定法であり、*Lex Saxonum* は802年か803年かに同様にして更めて定められたるものである(註一)。但し史上明らかなるが如く、これ等の制定法はオットー大帝(836—873)以來の慣習法尊重の傾向により、地方人の感情に合致せざるものは逐次忘れ去られてしまつた。たゞ合致する部分のみが、新に生じたる法慣習と共に保存せられて居つた。*Sachsenspiegel* は、十三世紀初頭に於ける低ザクセン地方の慣習法をアイケなる私人が文字に寫したものであつて、一般法の部(*Landrecht*) 並に封建法の部(*Lehnrecht*)の二部より成り、前者は更に三卷に分たれてゐる相當大部なものである(註二)。*Sachsenspiegel*の法源性に關しては特に説明する要なき程有名であるが(註三)、而もそれは所謂小帝法(*Kleines Kaiserrecht*) 其他によつて變更を受けつゝも、なほ十五世紀に於て法源として裁判所によつて適用せられてゐた事を附言する必要があらう(註四)。

(註一) 原文としては K. A. Eckhardt 監修に成る *Germanenrechte* の Band 1, 1935 と Band 2 の III, 1934 とを用ひた。

(註二) 原文としては K. A. Eckhardt 監修に成る *Monumenta Germaniae Historica* 中の *Sachsenspiegel Land-und Lehnrecht*, 1933 を使用した。

(註三) *Sachsenspiegel* の著作者、著作年代並にその法規性等に關しては、拙譯に成る早稻田法學別冊第八卷「ザクセン・シュピーゲル」の譯者序を參照。

(註四) Schröder-v. Künßberg: Lehrbuch der deutschen Rechtsgeschichte.
1932. S. 731.

定額賠償制に於ける個々の定額は如何にして定まつたか。形式的には、レックス・ザリカの卷頭に言ふが如く、人民とその有力者 (Procerum) との協定に基くのであるが、實質的には、加害に對して許されてゐた復讐を斷念するに際して提供されたる、各個の復讐斷念金(Urfehde)の額が、次第に集積統一して例を成したものと考ふべきである。斯くして、生命を害せられた場合に加害者側より被害者側へ提供せられる身代金^{ミノシロギン} (Wergeld)の額が、被害者の身分に従つて定まり、又加害の手段・方法・部位・場所・回数等によつて、それは異なるものとせられた。單に身體を傷害したる場合も亦之に準じて定まつた。又財産を侵害したる場合にもそれは應用せられた。これ等の場合には身代金に對して之を贖罪金 (Buße) と稱する習慣である。尤も廣義に於ては贖罪金は身代金をも包攝する。

斯くして確定して居る身代金又は贖罪金を請求する場合には、被害者は唯加害の事實を示さば足り、實際幾許の損害が自己に發生したかを示す必要は無かつた。又逆に、所定の身代金又は贖罪金の額以上に損害ありとも、そしてたとへ之を證明し得ても、特に之を許す規定なき以上はそれを請求することを得ない定であつた(註一)。

(註一) 特に實損賠償の請求が許される場合に就ては本稿 79 頁以下参照。

他人に對して違法行爲を犯せば、それは同時に其社會の平和（治安）を紊したことに成る。従つて加害者は被害者に對してのみならず、その社會又はその代表者に對して特に平和金を支拂はねばならなかつた。Lex Salica に於ては之を *fredus*, *fretus*, *fritus* 等と稱し、*Sachsenspiegel* に於ては之を *wedde* 又は *gewedde* と稱してゐる。その性質や、近代の罰金に近きものがあるが故に、本稿に於ては之を罰金と稱することゝする。王權次第に伸長するに至ると、國王は社會の代表者としてゝなく、固有の權力として命令權又は統制權とも稱すべき *bannus* (*Bannrecht*) を有するとせられ、その侵害に對しては特に賠償（所謂 *Banngeld*）が求められたのであるが、これと前述の *fredus* との區別は比較的早く失はれ、兩者は混淆せらるゝに至つた。そこで本稿に於ては兩者を併せて罰金と稱することゝする。罰金は身代金・贖罪金と一括して科せらるゝこともあり、又別に定額が科せられることもある。その詳細は罰金の章に譲る。

是等身代金・贖罪金・罰金に關する獨逸中世の法制を述ぶることが本稿の目的である。それ等のものを請求する手續、即ち訴の豫備手續として叫喚告知 (*gerüchte*) が爲さるべきであるとか、加害動物を差押ふべきであるとか、訴求の詳細なる手續、判決後の支拂の期日並に順序に關する定、其他贖罪金債務の相續性等に關しては、頁數等の關係上本稿では凡て省略に従ひ、論述を他の機會に譲る。

一 總 說

先づ第一に注意せらるべきは、贖罪金(廣義)は凡て被害者を基準として定められ、加害者を標準として居らないことである。生命を奪はれたる者の身代金の額が被害者の地位・身分・男女の性別・年齢等によつて定まり、身體・自由を侵害せられたる者の贖罪金が同様に定まり、盜罪に關する贖罪金が被害對象物の價格によつて定まるが如きである。然しこれに對して例外も多少は存在する。例へばレックス・ザリカに於て非自由人たる奴が盜罪を犯したるときには、自由人が同額の盜取行爲を爲せる場合と全く異なる額の贖罪金支拂を命ぜられて居り(47頁參照)、又奴が非自由人たる婢女を強姦したる場合には、自由人が婢女を侵したる場合と全く異なる額の贖罪金を徴せられる(37頁參照)。レックス・ザリカの増補も亦同一の方針を採り、奴が他人の婢女を殺せば自由人が之れを殺したる場合と異なる處置が爲され(Nov. II, 5)、解放自由人が解放自由人たる女を略取すれば自由人が之を爲したる場合と異なる贖罪金を支拂ふべき旨を規定してゐる(Nov. II, 14 § 1)。レックス・ザクソム並にザクセン・シュピーゲルに於ては、かゝる例外は見當らない。斯くの如く極めて稀なる例外は存在しないわけではないが、殆んど凡ての場合に於て被害者又は被害物件が基準となつて居るのである。

上述の如く加害者の身分が問題視せられぬといふ原則と Lex

Salica 第五十條第四項、裁判を行ふべき責ある其地の守護(Graf)がその職務を怠れば、死を以て贖ふか然らずんば自分が償するもの、即ち自分の生來身分に従ふ身代金を以て贖ふべき旨の規定とは、如何に調和して考ふべきものであらうか。思ふに、ここに提供せらるべき身代金は、上述のものが被害者に入るに反して國王の手に入るものであり、學術上罰金と稱して所謂贖罪金と區別せらるべきものに外ならない。Brunner 亦斯く解してゐる(註一)。Sachsenspiegel の Landrecht III, 64 § 11 に、膚髮の刑を免れんとする者は三シリングを百姓代(bürmeistere)に支拂ふべし、と規定してゐるのも性質に於て同様である。

(註一) Brunner: Rechtsgeschichte, II, S. 616. なほ本稿 64 頁参照。

第二に注意せらるべきは、贖罪金の受領が強制せらるゝか否か、換言すれば違法行爲に對して死刑身體刑を科するか贖罪金を徴収するか被害者の側に於て指示・選擇の自由があつたか否かの問題である。この問題は言ふ迄もなく、或種の違法行爲が必ず死刑又は身體刑を以て處置せらるべきであり、その種の違法行爲に對して金錢を以てする贖罪を許さぬといふやうな違法行爲が存在したか否かの問題とは異なる。後者に關しては現行犯に非ざる限り殆んど凡ての違法行爲は贖罪を許すといふのがレックス・ザリカの方針であるが、然しそれ以前の時代に於ては贖罪を許さず實刑を科する部分が甚多く、それ以後の時代に於ても漸次その部分が多きを加へて行つたと言ひ得る。かゝる部分

を除いては凡て金銭を以てする贖罪が許されてゐたわけであるが、然し被害者は必ずしも之を受領するを要せずとするのが從來の見解である。即ち、加害が身體傷害以下に屬す場合は之を贖罪事項 (Bußsachen) として復讐事項 (Fehdesachen) と區別し、有史以來これは必ず贖罪金によつて解決さるべく復讐を許さず、従つて被害者は之を受領する義務ありとせられたのであるが(註一)、殺人の如き復讐事項に於ては被害者側に於て之を欲する場合にのみ贖罪金の受領が行はるべく、被害者側に於て復讐を爲さんと欲すれば當然之を爲し得たとするのである。そしてその根據としてレックス・ザクソヌム中の第十八條に在る文言 *dominus compositionem persolvat vel fideiudam portet* が擧げられてゐる。非自由人たる奴に命じて人を殺さしめたる主人は、贖罪金を支拂ひ又は復讐を忍ばねばならぬといふ意である。かゝる特殊なる場合に關する史料が、全般を律したる規範の存在を證明するものとして適當であるか否かは怙く措き、從來ブルンナー初め多數の碩學が之を支持してゐる(註二)。

(註一) R. His: *Geschichte des deutschen Strafrechts bis zur Karolina*. 1928, S. 53.

(註二) H. Brunner: *Deutsche Rechtsgeschichte*. I, 1887, S. 163. 本文竝に脚註 34, 35.

第三に究むべきは贖罪金を表示する貨幣又はそれに代るべきものゝ研究である。レックス・ザリカ以下既掲の諸法に於ては凡てローマの貨幣單位デナリウス (denarios) とソリデス (solidos)

とが用ひられ、ザクセン・シュビーゲルのみにはプフュニヒ (phenning, phennige) シリング (schilling, schillingen) 竝にポンド (phunt)、外にヘラー (hellinc, hellingen) が用ひられた。デナリウスは又 penning, penting 等とも呼ばれ、ソリデッスは又 scillinga と呼ばれてゐたことは先覺の研究によつて明らかにせられてゐる(註一)。従つてザクセン・シュビーゲルの表現は決して突然現はれて來たものでなく、從來の傳統を引くものに外ならない。レックス・ザリカに於てはデナリウスとソリデッスとの比價は 40:1 であり、120 dinarios は 3 solidos に該當したのである(註二)。然るにザクセン・シュビーゲルの比價は全く之と異り、十二プフュニヒが一シリングに該り、又二十シリングが一ポンドに該つたのである(註三)。これは既に Capitulare Saxonicum に現はれてゐる比價、12 dinarios は 1 solidos に當るとの傳統を引くものである(註四)。ポンドは又マルク (mark) とも稱せられた(註五)。ヘラは半プフュニヒに外ならない。斯くて我々は、レックス・ザリカに於て既に家畜の頭數等を以てせず、鑄貨の貨幣單位を以て表示が爲されて居たことを知るのである。唯然し斯く言へばとて、當時それ等の單位貨幣が多量に流通してゐたと速斷してはならない。近時の研究に依れば、ゲルマン人の鑄造に係るデナリウスが第五世紀に於て既に流通してゐたとのことであるが(註六)、然し其量の多からざることは想像し得る所であり、ソリデッス貨も亦少く、Capitulare Saxonicum の第十一條は

特にソリデゥスと諸物との比價を定め、一年になる牡又は牝の牛は1ソリデゥスであり一年を増す毎に1ソリデゥスを増すとして居り、北部地方に於ては燕麥30シェフェル(1シェフェルは約我三斗に該る)、裸麥・大麥ならば15シェフェルが1ソリデゥスに該るが、Brukerer 地方に於ては燕麥40シェフェル、裸麥20シェフェルが1ソリデゥスに該ると定めて居ることは、少くとも低ザクセン地方に於て貨幣の流通は非常に少なかつたと考へて差支ないと思ふ(註七)。

(註一) Schröder-v. Künßberg: L. d. Rechtsgeschichte, 1932, S. 197.

(註二) 特に比價としては示して無いが、各條中に並べてある *dinarios* と *solidos* との比例は常に此關係に在る。

(註三) Ssp.-Lehnrecht, 68 § 8, etc.

(註四) 第十一條参照。フランケン地方の事には言及してゐないので、同地方の比價が如何様になつてゐたかは、これだけでは明瞭でない。

(註五) Ssp.-Landrecht III, 45 § 1.

(註六) Schröder-v. Künßberg: *ibid.* S. 197.

(註七) 我國に於ける貨幣流通の狀態と比較すると可なり年代的に類似してゐることが看取せられる。

第四に考究せらるべきは、レックス・ザリカ以下ザクセン・シュビーゲルに至る迄、凡て屬人法主義に立脚せる法律であつて、所謂屬地法主義と相異り、たとへ同一場所に居住するとも、素性を異にすれば決して同一の法律に依つては律せられない事である。即ち、たとへフランク地方に居住する自由人であつても、ローマ人たる者が殺されたる場合には原則としてフランク人の

半額を以て贖罪せらるべく (Lex Sal. 42 § 4; etc.)、フランク人なら 15 solidos を以て贖罪すべき場合にも、ザクセン人なら貴族でも 12 solidos 單純なる自由人なら 5 solidos 半自由人なら 4 solidos にて足るとせられ (Cap. Sax. 3)、又、ザクセン地方に住するともシュワーベン人は、その相續法に關し又裁判の非難に關し、自己特有のシュワーベン法に従ふべきものとせられるのである (Ssp.-Landrecht I, 17 § 2; 19 § 1; § 2; 29)。その他ヴェンデン人なるスラブ系の者に關する特例も散見する (Ssp.-Landrecht III. 69 § 2; 70 § 1; § 2; 73 § 2; § 3)。ユダヤ人に關する特殊なる規定も亦注意を惹く (Ssp.-Landrecht III, 7 §§ 1—4)。然し多くの場合、諸々のゲルマン人の間にはローマ人とゲルマン人との間に於けるが如き相違を置かない。例へば Lex Salica 41 § 1 にて、ゲルマン人に對する殺人の贖罪金は一律に 8000 dinarios 即ち 200 solidos とせられ、Ssp.-Landrecht I, 19 § 2 に於ては、相續竝に裁判の非難に關しての外はシュワーベン法もザクセン法も相異ることなしと言ふて居る。土地の相續に關し亦然り (Ssp.-Landrecht I, 30)。貴族・自由人・半自由人・非自由人(奴婢)の區別も生來に基くものではあるが、上述の意味に於ける區別と標準を異にすることは説明するまでもあるまい。これ等の身分の相違によつて贖罪金の額其他違法行爲に對する處置が異なることは勿論であるが、これを以て屬人法主義に基くものと言ふ者は無い。

扱て以下順次、身代金・贖罪金・罰金の順序に於て、且つ贖罪金は人に關するものを第一に、物に關するものをその次に、その他の事項に關するものを其三として述べるわけであるが、序でに損害賠償に關する規定が、各法源に於て占むる地位・割合を見ると、Lex Sal. に於てそれは最も重要な部分を占め、CdpS. に至ると教會の教義實行を期する爲の規定が、その地位を奪ひ、Cap. Sax. に於て再びその地位は回復せられ、Lex Sax. に於てもやゝ同様であるが、Sachsenspiegel に至ると他の事項に關する規定の飛躍的增加により、これ等に關する規定は相對的にその數竝に重要性を減じてゐる。

二 身 代 金

^{ミノシロキン}
身代金は贖罪金^{ミノシロキン}の一種であり、生命侵害ありたる場合に於ける定額賠償金を斯く稱するのである。従つてこれは生命金とも言ひ得やうか。尤も稀には生命侵害以外のものに對しても身代金を科してゐる法源がある(註一)。身代金を現はす語 Wergeld はラテン語 vir と同義のゲルマン語 wair, wer より系統を引いて居り Manngeld の意であるが、Lex Sal. では leode, leodi, leude 語を以て表はし(註二)、Ssp. にては wergelde, wergelt の語を以て表はしてゐる(註三)。

(註一) 英國のノルマン征服前の法源 Aethelbirht 64 に依れば、他人の男性生殖器を毀損したる者は身代金を科せられてゐる。又 Lex Sax. 20 に依れば、貴族が貴族を國外に賣却すれば同一の取扱を受けた。更に Ssp.-Landrecht I, 65 § 3 は、違法行爲の故に裁判所へ出頭すべき者の出頭を保證したる保證人あり、而も期日に違法行爲者を出頭せしめ得なければ、違法行爲者の身代金を支拂ふ責ありとしてゐる。なほ Brunner: idid II, S. 615; His: ibid. S. 96 参照。

(註二) Lex Sal. 24 § 1; § 2; 41 § 1; § 3; § 5; etc.

(註三) Ssp.-Landrecht I, 8 § 2; 42 § 1; II, 5 § 1; 16 § 5—7; III, 9 § 1; etc.

身代金は先づ、人の身代金と家畜其他の動物の身代金とに分たれる。言ふ迄もなく後者は前者の概念の應用せられたるものであり、Ssp.-Landrecht III, 51 § 1 に於てその額が詳細に規定せられてゐる。人の身代金は自由人のものと非自由人のものとに分たれてゐる。非自由人たる奴婢は元來人に非ずして物の

取扱を受け、従つて本來の意義に於ける身代金を有しなかつたのであるが、例外として之に關する定のあることもある。例へば Lex Sal. 35 § 6 それの Novellae II, 5. Lex Sax. 17 等であるが、唯この場合には決して身代金と之を稱して居らない事に注意すべきである。Ssp.-Landrecht III, 45 § 9; § 11 はそれ等の者が身代金を有せざることを明言して居る。非自由人と自由人との中間に位する半自由人は、必ず自由人に準じて身代金が定めらるる習慣であつた。

Sachsenspiegel はその Landrecht 竝に Lehnrecht に於て自由人を分つて七級としてゐる。然しそれ等各級者の身代金が全部相違するわけではなく、Ssp.-Landrecht III, 45 § 1 は諸侯・自由貴紳・參審自由人共に量目に不足なき十八ポンドなる旨を定めてゐる。小前百姓 (bieregelden) 並に高持百姓 (plechhaften) の身代金は十ポンド(同條 § 4)、水呑百姓 (lantzêten) のもの亦同額とせられる(同條 § 6)。半自由人 (late) の身代金は九ポンドである(同條 § 7)。自由人を七級に分つことは Lex Sal. や Lex Sax. に於ては行はれて居らない。然し自由人が全部平等ではなく、貴族は異別され又國王に對するものも特に考へられてゐる。Lex Sal. に於ては其他、國王の賓客たるローマ人とその他のローマ人竝に農奴たるローマ人とを區別し、賓客を殺したる者は 12000 dinarios 即ち 300 solidos の責あり、一般ローマ人なるときは 4000 dinarios 即ち 100 solidos の(註一)、農奴た

るローマ人なるときは 2500 dinarios 即ち $62\frac{1}{2}$ solidos の責ありとせられてゐる (Lex Sal. 41 §§ 5—7)。

(註一) Brunner: Rechtsgeschichte II, 1892, S. 612 脚註に於てフランク人が 200 solidi であるのに、ローマ人が 100 solidi であるのはローマ人を輕視したわけでなく、それはゲルマン人に於ける Sippe の制度がローマ人には無く、従つて Sippe に分配すべき額を加算するを要せなかつたからであるとしてゐる。

フランク人並にザリ・フランク法に従つて生活するゲルマン人達を殺せば、犯人は 8000 din. 即ち 200 sol. の身代金を支拂ふべきものと Lex Sal. は規定してゐる (Lex Sal. 41 § 1)。一般の自由人を殺したる者も亦同じ (Lex Sal. 15)。然し被害者婦人たりしときは 24000 din. 即ち 600 sol. の身代金とせられた (Lex Sal. 41 § 3)。但しこれは可妊婦たる場合に限り (Lex Sal. 24 § 6)、不可妊婦又は女兒なるときは 8000 din. (200 sol.) に過ぎぬ (同條 § 7)。又、妊婦ならば 28000 din. (700 sol.) となつてゐる (同條 § 3)。又、被害者が王臣たる (qui in truste dominica fuit) 場合には、特に一般人の三倍の身代金即ち 24000 din. (600 sol.) が犯人に科せられ (Lex Sal. 41 § 3)、特に王臣が從軍に際して殺されれば 1800 sol. の身代金が要求せられる (Lex Sal. 63 § 2)。從軍に際して殺されれば王臣たらざるときと雖も、なほ 24000 din. (600 sol.) の身代金が徴收せられるのである (同條 § 1)。其他、特に役附なる場合、例へば守護とも稱すべき Graf (grafione) が殺害されれば 24000 din. (600 sol.) の身

代金が發生し (Lex Sal. 54 § 1)、庄屋とも稱すべき Schultheiß (sacebarone) にして自由人たる者が殺されれば Graf と同額の身代金が (Lex Sal. 54 § 3)、Schultheiß 又は Untergraf にして王奴たる (qui puer regius fuit) 場合には 12000 din. (300 sol.) の身代金が犯人に科せられた (Lex Sal. 54 § 2)。Bannrecht の存在に因る。

殺人犯人はその者が自由人たる限り自ら責を負ひ被害者の身代金を賠償すべき責があるが、若し犯人が非自由人又は半自由人なるときは、半額を主人が支拂ひ、他の半額に代へて犯人を被害者側に引渡して責を免るゝことが出来る (Lex Sal. 35 § 5)。飼育せられたる四足獸が人を殺したるとき亦同じ (Lex Sal. 36)。尤もこれ等は被害者自由人たることを前提として居り、若し加害者も被害者も共に非自由人たりしときには、加害者の主人と被害者の主人は犯人を自分達の間で分けるのである (Lex Sal. 35 § 1)。身代金を提供すべき義務ある者は全財産を以て身代金に満つる迄賠償すべく、若し全財産を以てするも之に満たざるときは、十二人の宣誓補助者を立てゝ、最早地上にも地下にも財産なきことを明らかにする。勿論任意に犯人の最近親者が代つて支拂ふこともあるが、これは然らざる場合の手續である。宣誓の後我家に至り家の四隅の土を掌中に集めて、入口の閤の上に立つて左手にてその土を最近親者に投げる。父・兄弟等が代つて拂ひし場合にはこの者を除ける者の内、父方の三人母方の三人の

最近親者に對して之が爲される。自分は襟を外し靴を脱いで一本の棒により垣根を越して飛ぶ。斯くて三人づゝ半額を負擔して支拂ふべき責を負はしめられる。これ等の者の内に貧者あらば、更に此土投げを近親に行ひ以て全額の賠償を爲す。而もなほ額に満たぬときには證人を立てゝ四裁判期間待つて貰ふ。之を果し得ぬときには身を以て贖罪すべきことゝなる(Lex Sal. 58)。

殺人による賠償金即ち身代金受領者は、半額に關しては息子達であり、他の半額に關しては父の又は母の最近親である (Lex Sal. 62 § 1)。若し父方にも母方にも親族なきときには、その部分は國庫 (fiscus) に歸屬した (同條 § 2)。

殺人が未遂に終るも贖罪金を課せらるゝことがある。例へば溺殺を企てゝ水中に投入したるに生還したるときは、犯人は 4000 din. (100 sol.) の責を負はしめられた (Lex Sal. 41 § 9)。殺害せんとして殴打し外れて死に至らず (Lex Sal. 17 § 1) 又は毒矢を以て射殺せんとしたるときには 2500 din. (62½ sol.) の責ありとせられた (同條 § 2)。殺人の被害者が未だ通常の間として取扱はれざる間に犯行行はれたるとき、例へば、命名前の小兒又は未だ胎兒たる者が殺されたときは、たとへ自由人に屬すと雖も 4000 din. (100 sol.) の身代金が發生し、(Lex Sal. 24 § 4)、又通常の間たらざるに至つた者、例へば十字路に置かれたる手足なき自由人を殺したる場合にも同様 4000 din. (100 sol.) の身代金のみが支拂はれた (Lex Sal. 41 § 8)。單に殺人を

教唆せるのみなるときは殺人よりは輕かつた。殺人を教唆すれば被教唆者實行するに至らずと雖も 2500 din. (62½ sol.) の贖罪金が科せられ、報酬を受けて殺人の依頼を受諾すればたとへ實行に至らずと雖も同額の贖罪金が、又、これ等の教唆又は依頼を傳達したる者にも同額が科せられた (Lex Sal. 28 §§ 1—3)。

以上の如き身代金の外に、特殊なる殺害の方法を採りたることを理由とする特殊なる身代金の定がある。例へば或自由人を徒黨を組んで襲撃しそして殺害すれば、被害者一般人なるときと雖も 24000 din. (600 sol.) の身代金が發生し、若し王臣なるときには 72000 din. (1800 sol.) の身代金が發生するとせられる (Lex Sal. 42 §§ 1—2)。被害者の身に傷が三個以上存するときは、徒黨者の内三人が上述の身代金を支拂ひ、他の三人は 3600 din. (90 sol.) を支拂ひ、更に他の三人が 1800 din. (45 sol.) を支拂ふ責ありとせられる (同條 § 3)。被害者ローマ人なるか、半自由人なるとき、又は小供なるときには上述の半額のみが支拂はれる (同條 § 4)。又、戸外に於て、路上又は野外に於て徒黨によつて襲撃殺害せられれば、犯人中の三人が身代金を共同にて負擔すべく、誰であるかを證明されぬときには三人丈け 1200 din. (30 sol.) の責を負ひ、他の者の内三人は 600 din. (15 sol.) の責を負ふ (Lex Sal. 43 § 3)。五人乃至七人の宴會に於て殺人ありたるときには、全員で身代金を醸金するか又は犯人を引渡すべきである (同條 § 1)。然し八人以上なるときは一般の

規定に従つて處理せられる (同條 § 2)。殺害それ自體が特殊なる方法を以て行はれたのでなくとも、犯行後犯跡を晦ます爲に、屍體を泉水中に其他水中に投入し、又は樹枝其他の物體にて隱蔽すれば、24000 din. (600 sol.) の身代金が發生する (Lex Sal. 41 § 2)。若し被害者が婦人なるか王奴なるときには、斯くすることによつて 72000 din. (1800 sol.) の身代金が發生する。但し隱蔽物が樹皮その他殻の如きものなるときは 600 sol. たるのみ (同條 § 4)。

Lex Salica の増補 (Novellae) を見るに、身代金の額、その受領者等に於て多少の變遷を示してゐる。農奴たるローマ人も自由人たるローマ人と同額の 100 sol. となり (Nov. II, 1 § 2)、王奴その他の奴婢竝に解放自由人の身代金も同額となつた (同條 § 1)。被害者が他人有の婢女であり加害者奴なるときには、婢の價格の外に奴は 600 din. (15 sol.) の責ありとせられ、被害者が豚追ひ、職人等たりし場合も同様に扱はれ、單なる勞役者又は劣等なる非自由人たる場合には 600 din. (15 sol.) の責あるのみとせられて、奴の違法行爲能力が或程度認めらるゝに至つた (Nov. II, 5)。これは奴に財産保有能力が認めらるゝに至つた結果である。

身代金受領者に關しても多少變化を見た。半額を息子達が受領することは前と同じ。残る半額の内、半分を妻が受け他の半分を父系の三人母系の三人の最近親者が受領する。妻なきとき

にはその分をも合せてこれ等の親族が受領する。これ等の最近親者の間に於ては、その内の最近親者が先づ三分之二を取り、次の者が残餘の三分之二を取り、第三の者がその残餘を取るものであつた (Nov. V, 3)。

未遂犯處遇に關しても變更があり、自由人が他人を泉・濠其他へ殺害の意思で突き落せば、たとへ被害者生還するも加害者は 200 sol. の責ありとせられた (Nov. VI, 3)。婢女から胎兒を死産せしむるに至つた場合 62½ sol. 1 din. の責ありとせられ、その婢女が主人の備品室や納戸を掌つて居る者であつた場合には 200 sol. 1 din. の責を犯人は科せられるのである (Nov. IV, 3 § 10, § 11)。自由人たる妊婦を拳又は足で腹又は背を壓し因つて胎兒を死に致せば 200 sol. の責あり (Nov. IV, 3 § 4)、胎兒が死産せられれば 600 sol. (同條 § 5)、妊婦が因つて死亡すれば 900 sol. (同條 § 6)、國王の保護下に在る者ならば 1200 sol. (同條 § 7)、胎兒が女たりしときは 2400 sol. (同條 § 8) とせられた。ローマ婦人、半自由婦人、公婢たりしときは半額とせられた (同條 § 9)。殺人後隠匿の目的で屍體を燒却したる者は 600 sol. の責を負はしめられ、從者 (antruscione) たる身分を有する者又はかゝる身分の女を殺害して燒却したる者は 800 sol. の責を負はしめられた (Nov. V, 5 §§ 1—2)。

犯人知れざる屍體の處置に關して Novellae は特別の規定を設けた。人が二莊園間で殺されてゐたときには、裁判官たるべ

き Gaugraf 又は Graf は角笛を吹鳴らし、屍體を見知れる人が来れば、死者の親族に直ちに報知する。見知れる人が無ければ附近の者を集めて五本足の 高さ臺を 設けて 屍體を載せ、Graf は、それを七日間降してはならぬ事、次の裁判期日にはそれ等の 人々は裁判に出頭すべき事を宣言する。宣言を受けた人々は 若し身分高き者たるときは四十日以内に 65 人の宣誓補助者と 共に宣誓して身の潔白を申立て得る。身分高からざる者なるときは 15 人の宣誓補助者と共にする宣誓を以て免れ得る。四十 日以内に之を果さぬときは、それ等の者が身代金を負擔すべき こととなるのである (Nov. IV, 1)。

Capitulatio de partibus Saxoniae に至ると、それがザクセン 人に對する威嚇的目的を有したりし性質上、殆んど凡ての犯行 に對し死刑を以て臨み、身代金又は贖罪金を以て解決すべきも のは僅少であつた。主人又は 女主人を殺したる者は死刑 (Cdp S. 13)、Gaugraf を殺し又は殺す事を教唆したる者の財産は全 部國王に沒收せらるべしと規定した (CdpS. 30)。又火葬を行ひ たる者はそれのみを以て死刑とせられた (CdpS. 7)。

Lex Saxonum に至ると規定は可なり詳細となつたが、身代 金にて贖罪するを許さざる(實刑を伴ふ)違法行爲の種類は相當 に多く認められてゐる。フランク王國を顛覆せんとして謀叛せ る者、國王又はその息子の生命を 奪はんとせる者は 死刑 (Lex Sax. 24)、主人を殺したる者は死刑 (Lex Sax. 25)、主人の息子

を殺したる者、主人の娘・妻・母を凌辱したる者は主人の意思に従つて死刑 (Lex Sax. 26)、教會内で人を殺さば死刑 (Lex Sax. 21)、復讐に當つて其者の家の中にて殺せば死刑 (Lex Sax. 27) 等の規定は、その主なるものである。これ等の対象これ等の方法を除けば、殺人も贖罪することが許されてゐた。例へば貴族が殺されたときは身代金として 1440 sol. 外に和解金 (premium) として 120 sol. が支拂はれる (Lex Sax. 14)。但し婦人にして妊娠可能の者たるときは特に倍額が支拂はれる (Lex Sax. 15)。半自由人が殺されたるとき身代金は 120 sol. であるが、此場合には大シリングによつて支拂はれる (Lex Sax. 16)。即ち、一般の殺害に際しての身代金は小シリングと稱する 2 tremisses のもの (十二ヶ月の半に等價) であるが、此場合に限つて大シリングと稱する 3 tremisses のもの (十六ヶ月の半に等價) によつて支拂はれるのである (Lex Sax. 66)。従つて實質上は $120 \text{ sol.} \times \frac{3}{2} = 180 \text{ sol.}$ となる。

非自由人竝に半自由人が人を殺したる場合に關して Lex Saxonum は特則を置いた。非自由人たる奴 (servus) が主人に關係なく殺人を行ひたるときには、主人は奴に代つて身代金を提供せねばならない (Lex Sax. 51)。奴が犯行後逃亡して爾後主人が発見し得ざるときはその責を免れる。然し被害者側にて主人がその犯行に關與せるものとして之を責めれば、主人は十一人と共にする宣誓を以て之を免れる方法を探るべきであつた (Lex

Sax. 52)。一旦逃亡したる奴が再び歸來して從來の主人の許に入りたるときには主人が身代金を提供すべきことゝなること言ふ迄もない (Lex Sax. 53)。主人の命令で奴が犯行を爲したる場合に關しては、他人の妻の略取の如き 特別の明文は無いが、上述により勿論解釋が成立する。非自由人たる奴婢 (servus) が殺された場合に關しても Lex Saxonum は特に規定を置いた。貴族によつて殺されたるときは貴族は三人と共に宣誓して身の潔白を證するか又は 36 sol. を支拂はねばならず、自由人又は半自由人によつて殺されたるときは彼等は完全宣誓即ち十二人を以てする宣誓(註一)によつて身の潔白を證明せねばならない (Lex Sax. 17)。半自由人が主人の命令又は教唆によつて殺人を行ひたる場合に關しては特則が置かれ、かゝる嫌疑を蒙りたるときは主人は自己が全く犯行と無關係なることを十一人と共に宣誓を行ひその半自由人を放逐して責を免れべきである。若し之を保有すれば主人は復讐を甘んじて受くるか又は身代金を支拂はねばならぬ。前の場合に於て放逐せられた半自由人竝にその親族七人が身代金負擔者とせられた (Lex Sax. 18)。

(註一) Brunner: ibid. II, S. 384.

暗殺に關しても Lex Saxonum は特則を置き、一般の身代金の外になほ八倍の贖罪が要求せられ、然らずんば彼とその息子とは復讐の對象とならねばならなかつた。一般の身代金は三分之二を本人が三分之一を犯人の親族が負擔するが、八倍の贖罪

金は本人が之を負擔せねばならない。前者を親族に負擔せしむるのは、恐らく相戒めて事前發見を爲さしむる意味を有したのであらう。

死亡の結果の生ずるを俟たず、その結果の生ずべき行爲完成によつて直ちに成立する違法行爲として、認められたるものが二種ある。人を擱んで水中に投入したる者は 120 sol. の贖罪金を出すか、又は十一人の宣誓補助者と共にする宣誓を以て責を免れねばならぬ (Lex Sax. 10) とするは其一であり、橋・船又は岸から人を流水中へ突落して逃走したる者は 36 sol. を支拂ふか然らずんば二人の宣誓補助者と共にする宣誓を以て責を免るゝを要す (Lex Sax. 9) とするは其二である。

無過失殺人とも稱すべき場合に關しても Lex Saxonum は規定を置いてゐる。伐り倒した木で壓殺されたる者あるときには、たとへそれが故意に出づると否とを問はず、身代金全額を以て伐り倒したる者は贖罪すべきであり (Lex Sax. 54)、火を放つて木を焼く者は、若しその木の倒壞によつて人が壓殺せられれば、壓殺が放火後一晝夜以内に起りたるときに限り、之を贖罪する義務がある。然し一晝夜を過ぎて起りたる場合には責なきものとせられた (Lex Sax. 55)。こゝに今日に於ける相當因果關係理論に類するものあるを見る。

Sachsenspiegel に於ては、生來身分に従つて身代金の額が定つてゐることは既に述べた。(6 頁參照)。注意を牽くことは Ssp.

に於ては上述の諸法と異り、婦人の身代金額が男性に比して高からざるのみならず、それはかへつて男より低くなつてゐる事である。妻はその夫の半額であり、處女と寡婦とは生來身分に従つて男の半額がその身代金とせられてゐる (Ssp.-Landrecht III, 45 § 2)。離別せる婦人も亦同様であらう(註一)。男女を問はずその者が權利能力喪失者 (unechte lûte) なるときには身代金を有しない (同條 § 11)。彼等が殺害せられたときには刑罰が犯人に科せらるゝのみ(同上)。如何なる人々が權利能力喪失者たるかは Ssp.-Landrecht I, 38 § 1 に於て列舉せられて居る。職業に因るものあり、生來によるものあり、犯罪に基くものがある。權利能力喪失者に非る場合には、たとへ其者が不具者たりし場合と雖も全額の身代金が發生する。たゞ加害者側に於て、被害者はその不具となりしことによつて既に賠償せられて居り且つそれに基き後見に附せらるゝに至つてゐる旨を證明すれば、その限度に於て減縮する (Ssp.-Landrecht II, 20 § 2)。

(註一) Hirsch: Sachsenspiegel, 1936, S. 143, 258 脚註參照。

Sachsenspiegel は年齢に關する規定を特に設けた。六十歳を超ゆれば、本人之を欲すれば後見に附することを得るのであるが、後見に附したることによつて身代金の額は減縮しない (Ssp.-Landrecht I, 42 § 1)。又小供を死に致す者あらば、その犯人は小供の生來身分に従つて全額の身代金を支拂ふ必要があり、決して年齢によつての相異は無い (Ssp.-Landrecht II, 65

§ 2)。然し小供が加害者たる場合には小供は實刑を科せらるゝことなく、被害者側にその身代金を拂へば足りる。小供の後見人に支拂ひの責あるも、若し小供の財産あらばその内より支拂ふ(同條 § 1)。此處に小供とは十二歳未満の者を指す(註一)。

(註一) Ssp.-Landrecht は年齢を以てする能力の區別に關し四分主義を採り、十二歳未満即ち binnen sinen jären の者は kint と稱せられ、二十一歳未満(binnen sinen tagen)の者と區別せられてゐる。二十一歳に達したる者(die man zu sinen tagen komen)を成年者と稱すれば、未満の者は青年と稱すべきであらふ。成年を超ゆるに至りたる(boven sine tage comen)者即ち六十歳を過ぎたる者は成年者と區別せられ、やゝ青年に類する取扱を受ける。Ssp.-Landrecht I, 42 § 1 等參照。女子は年齢に拘はらず寧ろ小供に似たる取扱を受ける。同上 I, 45 § 1; III, 45 § 3 等參照。

Sachsenspiegel は身代金の支拂期日其他に關し規定を設けた。身代金はその發生の時より遅くも十二週間以内に支拂はるべく、權利者に最も便利な場所に於て爲さるべきである。支拂は其地に通用する銀又は錢を以てせらるべきであり、若し然るときには、權利者は之が受領を拒絶することを得ない。支拂期日を特に約定し、而もその期日以前に提供ありたる場合亦然り(Ssp.-Landrecht I, 65 § 4; III, 40 §§ 1—4)。法定の如き提供ありたるに債權者の不參其他によつて受領遲滯ありたる場合には、債權者はその日に受領する利益を失ふのみであつて、債權それ自體を失ふといふ事は無い(Ssp.-Landrecht II, 11 § 3)。債務者が複數なるときには各自は負擔部分を支拂ふべく、又共同債務者の内に支拂はざる者あるときは代つて全額に滿つる迄支

拂ふことを要する。此場合に支拂ひたる者は代つて債權者となる (Ssp.-Landrecht III, 85 § 1)。債務の支拂不能なるときは保證人を立て猶豫を乞ふべく、若し保證人を立て得ざるときには裁判官は債務者の身體を債權者に交付する。債權者は枷をかけて縛して置くことも、勞働せしむることも自由である。食事と勞働とは家僕なみに待遇すべく、それ以上に苦しめることは禁止せられる (Ssp.-Landrecht III, 39 § 1)。況んや之を殺すことは許されぬ。債務者が逃亡するも債務は免責せられず、債務者の身體は常に支拂の擔保物である (同條 § 2)。債務は相續せらるゝも相續人は相續財産中の動産の限度に於て責任を負ふのみである (Ssp.-Landrecht I, 6 § 2)。

Ssp. に於ては殺人が行はれても場合によつては身代金を發生しない。否、身代金を發生するは寧ろ過失犯 (Ssp.-Landrecht II, 38) 又は緊急避難の場合 (Ssp.-Landrecht II, 14 § 1; § 2)、動物の爲せる殺人 (Ssp.-Landrecht II, 40 § 1) に限られ、故意犯は實刑を科せられ又は特に個々の場合に定められる示談金 (Sühnegeld) によるのが Sachsenspiegel の方針であつた(註一)。即ち、秘密殺人・放火殺人 (Ssp.-Landrecht II, 13 § 4)、家來による主君の殺害、主君による家來の殺害 (Ssp.-Landrecht III, 84 § 2)、創傷を伴ふ殺害竝に打撃・衝撃・投擲の方法による殺害等には死刑が科せられて居る。然し人を殺して而も死刑が科せられず身代金をも免れる場合があることを Sachsenspiegel は

認めてゐる。その一は殺害が窃盜又は強盜を爲さんとする者に對して犯行に際し行はれたる場合であつて、この場合には特に死者を服罪せしむる手續を履むことを要する。七人宣誓又は死者に對する決闘の申出による。死者の親族は、死者を代表して決闘し得る (Ssp.-Landrecht I, 64; 69)。その二は單なる毆打又は輕微なる傷害を受けたる者が一周年以内に訴を提起せず而も遂に一周年後に至りそれが原因にて死亡したる場合であり、この際には死者の相續人は何等の身代金債權も又贖罪金債權も獲得しない (Ssp.-Landrecht III, 31 § 3)。

(註一) R. His: ibid. 97。

身代金制の應用せらるゝ場合の一として、訴訟續行に際しての出頭の擔保として提供する金額は被告人の法定身代金額を以て足りるとの規定があり (Ssp.-Landrecht III, 12 § 2)、たとへ訴が數多くその被告人に對して爲されてゐる場合でも亦然りとせられる(同上)。従つて特に保證人を立つることを要しない(同上)。かゝる場合に身代金を以てせず保證人を以てすることも出来る。そのとき期日に至り保證人が被告人をして出頭せしめ得ぬときには、彼は被告人の身代金の額に相當する金額を相手方に支拂ふ義務がある (Ssp.-Landrecht I, 65 § 3)。

Lex Sal. がその第九條第一項竝に第三項に於て、若し他人の家畜を傷害し而も自白したる場合には、その全價額を賠償して傷害せられたる家畜を受くと定め、實損賠償的規定を置くに反

して、Sachsenspiegel は定額を以て賠償すべきものとし、身代金の名に於てその額を法定してゐる。雞の身代金は半プフエニヒ、家鴨は同額、鶩鳥は一プフエニヒであるが、孵卵中の雞竝に鶩鳥は三プフエニヒであり、罔鴨も同額とせられる (Ssp.-Landrecht III. 51 § 1)。乳兒期の仔豚竝に仔山羊の身代金は三プフエニヒ、猫も同額。仔羊のは四プフエニヒ、仔牛のは六プフエニヒ。乳兒期の仔馬は一シリング、番犬も同額。牧羊犬のは三シリング、牡豚竝に一年以上の豚のも同額。牛の身代金は四シリングであり、仔豚を孕んで居り又は授乳中の牝豚、成長し切つた牡豚、竝に驢馬の身代金は五シリング。騾馬のそれは八シリング、挽牛竝に仔馬のも同額。完全に勞働せしめ得る其他の馬のは十二シリング、未だその域に達せざるものは年齢に比例して定まる。奉仕用の乗馬の身代金は一ポンドとせられてゐる (同上)。騎士の馬、上馬、婦人用馬竝に瘠身馬は上述のものより除外せられ、肥飼豚も除外せられ、これ等のものに就ては實損を以て賠償せらるべきことゝ定められてゐる (同條 § 2)。

Ssp. は又その肉が食用に供し得る家畜と然らざるものとに分ち、前者を故意に又は故意に非ずして殺したる者は身代金を以て賠償せねばならぬが、被害者は被害家畜を保有するが故に特に附加的贖罪金を要求することを得ない (Ssp.-Landrecht III, 48 § 1)。食用に供し得ざる家畜を殺す者は家畜の身代金に贖罪金を添へて賠償すべきであり、足一本を不具にしたるとき亦然

りとせられる(同條 §2)。但しそれが故意に因らざりしことを加害者が誓へば、贖罪金は免除せられる(同條 §3)。又殺害が正當防衛に出でたときには身代金を支拂ふ必要はないのであるが、その場合にはその旨聖物にかけて誓はねばならなかつた(同條 §4)。

三 贖 罪 金 (其 一)

狹義の贖罪金もその内容は多岐に亘り、人の身體傷害、姦淫、自由の侵害、殊に略取誘拐、罵詈等を初として、強盜・竊盜等の盜犯竝に放火による又は毀棄による財産侵犯によつて、又は約束違背によつてそれは發生し、そして其額を異にする。本節に於ては人に關するものゝ大要を述べ、次節に於て物に關するものを、然る後にその他のものを説くことゝする。

先づ人の身體傷害の場合を見るに、Lex Salica 以來 Lex Saxonum に至る迄は侵害方法又は被害部位等の異なるに従ひ特に金額が定められて居るのであるが、Sachsenspiegel に至ると多く身代金の額を基準として分數的數字を以て定められてゐる。Lex Salica は單に握り拳を以て殴打せる場合、一撃ならば 3 solidos 三撃以上ならば 9 solidos 即ち 360 dinarios の贖罪金が發生する旨を定めてゐる (Lex Sal. 17 § 8)。進んで、自由人が自由人を棒にて殴打せる場合にも同上の贖罪金が發生する旨を定める (同條 § 6)。但し出血あらば刃物による傷害と同様 600 din. (15 sol.) の責がある (同條 § 7)。刃物による傷害により地面に血が注ぐ程度に至れば同上の責があり (同條 § 5)、内臓に至る傷を與へたる者は 1200 din. (30 sol.) の外に治療費として 5 sol. の責がある (同條 § 4)。頭蓋骨の現はれる程度の傷を與へたる場合亦同じ (同條 § 3)。被害部位を基準として手・

足・眼・耳・鼻を切斷せるときは 4000 din. (100 sol.) とし (Lex Sal. 29 § 1)、これ等のものが切取られざるときは 2500 din. (62½ sol.) とする (同條 § 2)。手竝に足の拇指を切斷せる場合には 2000 din. (50 sol.) とし (同條 § 3)、それが切取られざるときは 1200 din. (30 sol.) とする (同條 § 4)。これ等は言ふ迄もなく一般自由人につき規定せられて居るのであり、従つて手足等の贖罪金の額は身代金の半額に該當してゐる (Lex Sal. 41 § 1 參照)。

Lex Salica の Novellae に至ると之に種々なる定が加はつた。ザリ・フランク人がザリ・フランク人を去勢すれば 200 sol. 即ち身代金と同額の贖罪金と 9 sol. の治療費との責があり (Nov. V, 6 § 1)、従者 (antrustione) たる身分を有する者を去勢すれば 600 sol. の贖罪金と 9 sol. の治療費との責があつた (同條 § 2)。又、女兒の髪を親族の同意なくして剃れば 4000 din. (100 sol.) の責あり (Nov. I, 4 § 2)、長髪の男兒の髪を親族の同意なくして剃れば 1800 din. (45 sol.) の責がある (同條 § 1)。女の髪の元結を切つて髪が肩にかゝるやうにすれば 30 sol. の責あり (Nov. IV, 3 § 2)、女の冠物を髪から解き放ちたる者は 15 sol. の責がある (同條 § 1)。以上は加害者が自由人の場合であり、若し非自由人たるときには之と異なる。即ち奴が自由人たる女を押し又は髪を解きたる場合には、手の切斷刑か又は 15 sol. の贖罪金を命ぜられる (同條 § 3)。

Capitulatio de partibus Saxoniae 竝に Capitulare Saxonicum には身體傷害に關する規定は見當らないが、Lex Saxonum に至ると特に貴族竝に半自由人に關して詳細な規定を置いた。半自由人が被害者たるときは凡て貴族に對するものゝ十二分の一の割合とせられる (Lex Sax. 16)。貴族の眼の片方又は耳の片方を破壊したるときは、その贖罪金は 720 sol. であり、若し雙方ならば 1440 sol. である (Lex Sax. 11)。即ち身代金の額と同じである (Lex Sax. 14)。鼻を切落したる場合にも 720 sol. 手・足・睪丸の片方を切斷すれば 720 sol. 雙方ならば 1440 sol. の贖罪金とせられる (Lex Sax. 11)。これ等のものが切落されずに其場所に留まつて居る程度ならば睪丸を除き凡て半額にて足るとせられ、多少とも動かし得る場合には四分之一の額にて足るとせられた (Lex Sax. 12)。拇指が切斷せられれば 360 sol. 切落されなければ 180 sol. 小指全部は 240 sol. その二節^{フシ}は 160 sol. その一節は 80 sol. 人指指は 180 sol. そしてその一節は各右の三分之一の額。中指と薬指とは 120 sol. そしてその一節は右の三分之一の額。足の拇指は手の拇指の半額、次の三本は手の中指の半額、小指は更にその半額となつてゐる (Lex Sax. 13)。

次に傷害の程度に應じて定めらるゝ贖罪金の額を見るに、貴族を單に毆打したるに過ぎざるときは 30 sol. の責あり、若し之を否認せんとするときは二人の宣誓補助者と共にする宣誓を以て爲さねばならぬ (Lex Sax. 1)。毆打の結果斑點を生じ又は

腫瘍を生ぜしめたるときは 60 sol. の責あり、之を否認せんとすれば五人の宣誓補助者と共にする宣誓を以てせねばならぬ (Lex Sax. 2)。若し出血するに至れば 120 sol. の責あり、之を否認せんとすれば十一人の宣誓補助者と共にする宣誓を以てせねばならぬ (Lex Sax. 3)。骨が出るに至つた場合には 180 sol. の責があり、否認は同上の方法を以て爲され得る (Lex Sax. 4)。骨折の場合、顔の相好を變じたる場合、軀幹・腰部・腕を貫通したる場合には 240 sol. を支拂ふか又は上述の如き方法を以て否認すべき義務がある (Lex Sax. 5)。髪毛を掴んで攻撃に出でたる場合には 120 sol. の責があり、否認せんとせば十人の宣誓補助者と共にする宣誓を以て爲さねばならぬ (Lex Sax. 7)。着衣又は柄を劍を以て切りたるに過ぎざる場合は 36 sol. の責あり、否認は二人の宣誓補助者と共にする宣誓を以て爲されねばならぬ (Lex Sax. 6)。孰れにせよ Lex Saxonum に於ては盜罪の可なり輕微なるものにては死刑を科する定を爲す一方、人命・身體而も貴族のそれを侵害してもなほ贖罪を許すと定めて居ることは、大いに注目すべき事象である。

Sachsenspiegel に於てはその規定の方法に格段の進歩を見せ、身體傷害の場合に關しては特に一々數字を以て定めず身代金に對する分數的割合を以て定めたる一方、なほ他方に於て内容に關し Lex Saxonum と根本的に相違を來してゐる。但し、身體傷害に關せざる一般贖罪金に就ては直接に金額を以て定め

られてゐることを注意すべきである。唯それが生來身分に従つて定まつてゐることは共通してゐる (Ssp.-Landrecht II, 16 § 3)。又一つの傷害に對しては教唆・幫助等を原因とする場合は格別、一般には一人より多くを訴へることを許さない (Ssp.-Landrecht III, 46 § 2)。

先づ手・足・眼・鼻・耳竝に男の陽物の外に、口と舌とが加へられ、これ等が不具化せられれば、その孰れが不具化せられたる場合たるを問はず身代金の半額を以て賠償をせらるべきであるとする (Ssp.-Landrecht II, 16 § 5)。一本一本の指竝に足アシユビの趾は身代金額の十分之一を以て贖罪せらるべきである (同條 § 6)。眼の雙方が耳の雙方が、其他手足等の雙方が同時に傷害せられても所定の額の二倍となることはなく、常に身代金額の半額を以て贖罪せられる (同條 § 7)。手及び足、眼と耳と手等の各部位に亘るとき亦同じ(同上)。然しながら傷害が異時なるとき、換言すれば不具者を更に傷害したる場合には、完全なる身體を傷害したる場合と同様、身代金の半額にて贖罪せらるべきである(同上)。傷害の個所が同一部位たりしときと雖も同様である (同條 § 9)。加害者は然しその部位に對しては嘗て贖罪せられたることある旨を證明してその責を免れることが出来る (Ssp.-Landrecht II, 16 § 9 ; 20 § 2)。殴打のみにて傷害に及ばざる場合には、上述と異り一般の贖罪金が支拂はれるのである (Ssp.-Landrecht II, 16 § 8) (註一)。

(註一) 60 頁以下参照。

こゝに注意すべきは、これ等の身體傷害に關する贖罪金も、被害者之を受くることを拒まざるときに限り授受され得たのであり、被害者側にて要求すれば、他人を不具にし又は傷害したる者は、その手を切斷せられねばならなかつた (Ssp.-Landrecht II, 16 § 2)。然し若し通常の訴訟手續によつて服罪せしめられたのでなく、決闘によつて服罪せしめられたる場合には死刑を受けねばならなかつた(同上)(註一)。但し、傷害に及ばざる程度に於て毆打又はむしり合が行はれたるときは、實刑は科せられず贖罪金が科せらるゝのみなることは嘗て述べたる通りである (Ssp.-Landrecht III, 37 § 1)(註二)。

(註一) 決闘の方法竝に手續に關しては Ssp.-Landrecht I, 63 §§ 1—5 が詳細に規定してゐる。其他にも規定多し。

(註二) 35 頁參看。

家畜の爲せる人體傷害に關して Sachsenspiegel は特則を置いてゐる。召使又は雇人の監視の下に在りたる家畜が人を傷害したる場合には其監視人が傷害の責を負ふべきであるが、若し責任者逃走すれば被害者側は加害動物を留置し、所有者をして賠償せしめる。所有者はその動物の價額の限度に於て賠償するか、又はその家畜を抛棄すべきである (Ssp.-Landrecht II, 40 § 4)。家畜が放牧せられて監視人なきに際して人を不具にしたる場合には、所有者は唯加害家畜の身代金又はその價額の限度に於て責を負へば足り (同條 § 1)、若し欲すればその家畜を抛

棄して全然責を免れることも出来る (同條 § 2)。

身體傷害に關する説明を終つて姦淫に關するものに移る。
Lex Salica は強姦・和姦の雙方を認めて居り、自由人と自由人、自由人と非自由人たる婢女、非自由人たる奴と自由人、非自由人と非自由人とに區別して定められてゐる。但し妻たる身分を有すると否とを區別してゐない。自由人たる女を自由人が強姦すれば贖罪金は 2500 din. (62½ sol.) とせられ (Lex Sal. 13 § 4; 25 § 1)、和姦すれば 1800 din. (45 sol.) とせられる (25 § 2)。自由人が非自由人たる婢女を犯したるときは 600 din. (15 sol.)、若しその婢女が王婢たるときには倍額 1200 din. (30 sol.) の責ありとせられる (同條 § 3; § 4)。これは秘かに行ひたる場合であり公然と之を行へばその自由人は自由を喪失して奴となる (同條 § 5)。自由人たる女が非自由人たる奴と婚すれば同様にその女は自由を喪失して婢女となる (同條 § 6)。隨從して去れる場合亦同じ (Lex Sal. 13 § 8)。非自由人たる奴が非自由人たる婢女を犯しその結果死亡せしめたときは、奴の所有者は婢女の所有者に對して婢女の價額を支拂ふべく、その他に奴自身は婢女の所有者に 240 din. (6 sol.) を支拂ふことを要する。若し支拂はざればその奴は去勢せられる (Lex Sal. 25 § 7)。若し死に至らざりし場合には 120 din. (3 sol.) を婢女の主人に奴は支拂ふか然らずんば婢女の主人よりその背に三百の笞打を受けねばならぬ (同條 § 8)。

Lex Salica の Novellae は自由人たる女が非自由人たる奴と婚することを責めて、女は平和喪失とせられその財産は凡て國庫に歸屬すべきものとした (Nov. III, 1 § 1)。平和喪失は死刑に準ずるものであり、食物を與へ宿泊せしむることは一般に禁止せられて居り、若し之を侵せば親族たりとも 15 sol. の罰金を科せられる (同條 § 2)。こゝに Lex Salica の規定の一段と強化せられたることを看取し得る。従つて女の親族に當る者の誰かが女を殺しても他の親族竝に國庫はその罪を問ふことなく (同上)、その奴は最も重き刑罰たる車裂の刑に處せられる (同上)。若し徒黨を組んで或場所に赴き又は途中を擁して暴力を以て婦人又は少女を姦すれば、一人たると多數たるとを問はず 200 sol. の責がある。立會ひたる者は自ら姦せずと雖も各 40 sol. の責がある (Nov. V, 7)。200 sol. は言ふ迄もなく一般自由人の身代金の額である (Lex Sal. 41 § 1)。

Lex Saxonum に至る迄のものには特に姦淫に關しての定が置かれてゐない。唯 Capitulatio de partibus Saxoniae の第二十條に、禁止せられ許可せられざる婚姻を爲したる者は、其者貴族ならば 60 sol. 自由人ならば 30 sol. 半自由人ならば 15 sol. の贖罪金の責ありとせらるゝのみ。Sachsenspiegel に至ると、配偶者なき者の和姦は處罰せられず又贖罪金の定もなく、姦通竝に強姦は凡て實刑殊に死刑を以て臨まれてゐる。被害者が他人の妻たると然らざる場合とは之を問はない (Ssp.-Landrecht II,

13 § 5)。流浪女(淫賣婦)たるとき、權利能力喪失者たるとき亦然り (Ssp.-Landrecht III, 45 § 11; 46 § 1)。強姦に用ひられたる建物は凡て破却せらるべく、其處に居合せたる凡ての生き物は首を刎ねらるべきものとせられる (Ssp.-Landrecht III, 1 § 1)。建物の所有者は裁判期日に出頭して反駁し得るが、之を過ぐれば爲し得ない。破却は賠償を伴はない(同上)。

略取誘拐は自由人に對するものと非自由人に對するものとに分たれ、非自由人を略取誘拐することは寧ろ次節に於て盜罪の一種として論ずることが理論上正しいとは思ふが、それが外貌上自由人と同一なる爲に、之を自由人と一括して此處に論じやうと思ふ。自由人を略取誘拐することは更に被略取誘拐者が他人の妻たるか否かを標準として區別せられる。

Lex Salica は自由人(男・女)を略取して賣却したるときには 8000 din. (200 sol.) の責ありとし(註一)、若し之を免れんとせば殺人の場合と同一の方法により宣誓補助者を用ひてその主張を爲すべしとする (Lex Sal. 39 § 2)。他人の妻をその配偶者の生存中略取したる者も同額の責ありとせられる (Lex Sal. 15)。但し他人の配偶者を略取して婚姻を爲せる者は唯 2500 din. (62½ sol.) の責ありとせらるゝのみ (Lex Sal. 13 § 10)。略取がローマ人に對して行はれたるときは婚せずと雖も責は 2500 din. (62½ sol.) に止まる (Lex Sal. 39 § 3)。Lex Salica の Novellae も他人の妻をその配偶者の生存中略取したる者の責に關し、從來と

全く同一内容の規定を特に置いた (Nov. II, 17)。Lex Saxonum は之を改め、他人の妻を略取したる者は女の父に 300 sol. 女の夫に 300 sol. を支拂ひその外に 300 sol. を以て其女を贖はねばならぬものとした (Lex Sax. 49)。若し其女が母と共に通行中たりし場合にはその上母にも 300 sol. を支拂ふ必要があつた (同上)。これを、主人の命令に基いて半自由人又は非自由人が行ひたる場合には、その主人が責を負ふべきことは言ふ迄もない (Lex Sax. 50)。

(註一) 即ち生命侵害に對する身代金と同額である。

ついでに考へらるべきは婚姻料の問題である。Lex Salica 竝にその Novellae は寡婦に關してのみ規定してゐるが、Lex Saxonum は一般の婚姻に關して規定してゐる。妻を娶るときにはその親族 (父母等) に對して 300 sol. を支拂ふ必要があり、親族同意せざるも女同意を爲せば親族に 600 sol. を支拂つて之を妻とすることが出来る。然し本人も同意せざるに暴力的に爲されたるときには、親族に 300 sol. 本人に 240 sol. を支拂つた上、女を返還せねばならぬものとされた (Lex Sax. 40)。寡婦に關しては Lex Salica はその第四十四條に詳細に規定してゐる。要領を摘記すれば、寡婦と婚せんとする者は豫め Thingrichter と Zentgraf の面前に來て一定の手續を経て 3 sol. 1 din. を受領權利者に提供せねばならない (Lex Sal. 44 § 1; § 3)。若し之を怠ればその者は 2500 din. (62½ sol.) の責ありとせられ

る(同條 § 2)。受領權利者は (1) 姉妹の息子達の中の年長者、かゝる者無ければ (2) 姪の息子達の中の年長者、次に (3) 母系の從姉妹の息子、(4) 母の兄弟、(5) 夫の兄弟にして相續人たらざる者、(6) これ等の者無きときは第六親等迄の最近親者の順である(同條 §§ 4—9)。これ等の者全部無きときは國庫に歸屬する(同條 § 10)。その *Novellae* は大分趣の異なる規定を設け、再婚せんとする寡婦の側より寡婦が嘗て亡夫より受けたるものゝ内より亡夫の親族に離別料を支拂ふ事を定めた。寡婦と婚せんとする相手方ではない。寡婦は、若し前夫より受けたる婚姻贈與が 25 sol. なりしときはその内 3 sol. を、若し 62½ sol. なりしときには 6 sol. を、離別料として亡夫の父母に、父母なければ兄弟に、兄弟なければ長兄の息子に與ふべく、かゝる者もなきときは國庫に代つて *Graf* 又は *Gaugraf* が之を受領することゝせられた (*Nov. III*, 3)。九人の立會人の面前にて一定の方式に従へる文言を述べ、自分が實家より婚家に齎した物を遣して行くこと、離別料を支拂ひたる事を宣言して、婚姻贈與の三分之二を携へて再婚する(同上)。若し此方式を履まぬと此三分之二のものを失ふ外に 62½ sol. を國庫に納付すべきものであつた(同上)。*Lex Saxonum* は再び、寡婦を娶らんとする男の側よりする支拂を規定してゐる。即ち彼は寡婦の後見人たる寡婦の息子・亡夫の兄弟・亡夫の最近親男子に對して、代金 (300 sol. ならん) を提供し、若し後見人が同意せざるときは他の親族に

300 sol. を託して後見人に渡さんことを乞ひ、その者の同意を以て後見人の同意に代へることを得るものとした(Lex Sax. 43)。ヴェンデン女の支拂ふ婚姻料は上述のものと異り半自由人たる立場に於て主君に支拂ふのであつた (Ssp.-Landrecht III, 73 § 3)。

扱て立戻つて一般の婦女に對する略取誘拐を見るに、Lex Salica は、若し三人の男が共に自由人たる婦女を略取すれば各人 30 sol. の責あり、それ以上の人數なるときは超ゆる者一人毎に 5 sol. の責あり、若し箭を持參して傍に在りたる者(見張人)は各 3 sol. の責ありとせられる (Lex Sal. 13 §§ 1—3)。錠のかゝる室又は機織小屋から略取せられればその價額と訴訟費用とが支拂はれる(同條 § 5)。特に國王の保護の下に在る娘が略取せられれば平和金として 2500 din. (62½ sol.) が國王に支拂はれる(同條 § 6)。以上は加害者自由人たる場合であるが、若し半自由人又は王奴が自由人たる婦女を略取すればその者は死刑に處せられた (同條 § 7)。又他人の婢女を自由人が妻とすれば非自由人となるの外なく(同條 § 9)、その上 1200 din. (30 sol.) の責がある。同時に價額賠償並に拒絶贖罪金の責があつた。奴を盜める場合亦同じ (Lex Sal. 10 § 1; 39 § 1)。かゝる場合に奴婢が主人の物を持去れば奴婢の代價、物の代價の外に 600 din. (15 sol.) の責を犯人たる自由人は負はしめられた (Lex Sal. 10 § 2)。奴が婢を強制的に連れ去れば、奴は婢の主人に 120 din. (3 sol.) を支

拂ふ責がある (Lex Sal. 25 § 9)。略取に非ずして之と同一の經濟的苦痛をその主人に與へるものに解放がある。他人の半自由人を、國王の面前で *dinario* の方法でその主人の意に反して解放を爲せる者は、4000 *din.* (100 *sol.*) を支拂ふの外、半自由人の財産を主人に返還せねばならない (Lex Sal. 26 § 1)。又それが奴婢に對して行はれたる場合には奴婢の價額の外に 1400 *din.* (35 *sol.*) の責ありとせられた (同條 § 2)。

略取に非ずして一時的に他人の自由を束縛するものとして下記の如きものが認められてゐた。其一は捕縛であり、理由なくして自由人を捕縛したる者は 1200 *din.* (30 *sol.*) の責があり (Lex Sal. 32 § 1)、之を他所に連れ行きたる者は 1800 (45 *sol.*) の責ありとせられた (同條 § 2)。捕縛に至らずと雖も相手方が自由人たる婦人たれば手・指・腕に觸れたるのみにて 600 *din.* (15 *sol.*) の責ありとせられ (Lex Sal. 20 § 1)、若し腕を押へれば 1200 *din.* (30 *sol.*) の責あり (同條 § 2)、肘に手をかければ 1400 *din.* (35 *sol.*) の責ありとせられた (同條 § 3)。又通路閉塞を行へば被害者自由人たる男子なるときは 600 *din.* (15 *sol.*) の責あり、婦人ならば 1800 *din.* (45 *sol.*) の責ありとせられた。押し戻したるとき亦同じ (Lex Sal. 31 §§ 1—2)。

人の肉體に對しては何等の侵害を加へなくとも、人の精神に對して重大な侵害を與ふるものとして、疾くより罵詈は違法行爲とせられ、それに對し贖罪金が定められて居る。行爲が第三

者の面前に於て行はれたると否とを問はない。他人を魔法使と罵れる者は 2500 din. (62½ sol.) の責あり (Lex Sal. 64 § 1)、自由人たる女を魔女と罵れる者はその三倍即ち 187½ sol. の責ありとせられる (同條 § 2)。自由人たる女を娼婦と罵れる者は、若しそれが事實たらざりしときは 1800 din. (45 sol.) の責あり (Lex Sal. 30 § 3)、他人を密告者又は偽證者と罵れる者は、若しそれが證明せられざるときは 600 din. (15 sol.) の責あり (同條 § 7)、他人を女蕩し又は糞野郎と罵れる者は 120 din. (3 sol.) の責あり (同條 § 1; § 2)、他人を狐又は鬼と罵れる者も同額の責あり (同條 § 4; § 5)、他人が楯を抛つたと咎め而もそれが證明せられざるときも同額の責ありとせられた (同條 § 6)。Sachsenspiegel に至れば、唯、虚言者として非難せられたる者はその生來身分に應じて贖罪金の支拂を受くる旨の規定あるのみ (Ssp.-Landrecht II, 16 § 8)。生來身分に應じての贖罪金とは次節に述ぶる所のものであつて、身體傷害等に關するものではない(註一)。たゞ、自分の法定の贖罪金を受くることを法廷で拒絶したる者は爾後全然贖罪金を請求する權利を失ふ旨の規定は (Ssp.-Landrecht II, 6 § 1)、孰れの種類の贖罪金にも共通して適用ありしものと考えべきである。

(註一) 60 頁以下參照。

四 贖 罪 金 (其 二)

財産に對する侵害行爲の王座を占むるものは言ふ迄もなく盜犯であり、それは強取竊取に分たれる。其他放火、器物毀棄、狩獵妨害、不法差押等がある。横領、詐欺は盜罪に吸収せしめられる。Lex Salica に於ては、これ等殆ど凡ての場合に贖罪金の額が定められ、非自由人に非ざる限り(註一)死刑其他の體刑を科せらるゝことなき建前となつてゐるが、Lex Saxonum に至ると放火のみならず(Lex Sax. 38)、馬を盜めば死刑(Lex Sax. 29)、2 solidos の價值ある四歳牛を夜盜めば死刑(Lex. Sax. 34)、3 solidos の價值ある品物を薄暮又は夜盜めば死刑(Lex Sax. 35)、蜂房を中庭より盜めば死刑(Lex Sax. 30)となつて居り、實刑主義に移行してゐる。Sachsenspiegel に至るも、盜犯者は原則として死刑に處せらるゝこととなつてゐる(Ssp.-Landrecht II, 13 § 1)。唯特殊なる場合に限つて贖罪金を以てすることが許されてゐるのである。尤も、その場合は可なり多い。

(註一) 47 頁及 48 頁參照。

Lex Salica は強盜と竊盜とを分ち、前者は比較的簡單に規定して居るが後者は詳細を極めてゐる。そして後者には、法定の贖罪金が科せらるゝの外、常に價額賠償と拒絶贖罪金とが科せられてゐる點は、重大なる相違である。盜品の價額の極めて僅なる場合と雖も、夜盜なるときは可なり多額の贖罪金が科せら

れた。以下これ等を分説することとする。唯特に註記せざる限りそれは自由人の犯行に關するものたることを留意すべきである。

一般に自由人を襲撃して掠奪すれば 2500 din. (62½ sol.) の責ありとせられるが (Lex Sal. 14 § 1)、フランク人がローマ人を掠奪せるときには 1200 din. (30 sol.) の責ありとせられ (同條 § 3)、逆にローマ人がザリ・フランク人を掠奪せるときには 2500 din. (62½ sol.) の責ありとせらる (同條 § 2)。重き地位必ずしも重き責任を生ずるものではなかつた。他人が手中に保持する物を奪へば價額賠償の外に 1200 din. (30 sol.) の責あり (Lex Sal. 61 § 1)、又死者より暴力を以て掠奪すれば 2500 din. (62½ sol.) の責あり、他人の贓物を暴力を以て奪へば同額の責ありとせられた (同條 § 2)。他人の所に在り自己の物として主張しつゝあるものでも、暴力を以て持去れば 1200 din. (30 sol.) の責あり (同條 § 3)、睡眠中の者より掠奪すれば 100 sol. の責ありとせられた (同條 3a)。未だ埋葬せざる死體より掠奪すれば 2500 din. (62½ sol.)、死體を發掘して掠奪すれば 8000 din. (200 sol.) の責ありとせられた (Lex Sal. 55 § 1; § 3)。その上、後者の場合にはその犯人は平和喪失者となり、死者の遺族に賠償してその遺族によつて彼を再び人間社會へ入れることが人々に懇願された時に、漸く平和喪失を免れることが出来る (同條 § 2)。此復歸以前にはたとへ妻と雖も犯人に食を給し宿泊せしめては

ならないので、若し之を犯せば 600 din. (15 sol.) の贖罪金に處せられた(同上)。

竊盜が戶外に於て行はれれば、そして 2 dinarios の價額のものを盜めば、犯人自由人たる限り價額賠償竝に拒絶贖罪金の外に 600 din. (15 sol.) の責あり (Lex Sal. 11 § 1)、40 dinarios のものを盜めば 1400 din. (35 sol.)、それが夜盜たるときは 2 din. たりとも 1200 din. (30 sol.)、5 din. 以上に及べば 1400 din. (35 sol.)、錠を破り又は合鍵を用ひたるときは 1800 din. (45 sol.) の責ありとする (同條 §§ 2—5)。これ等の場合に價額賠償と拒絶贖罪金の附隨すると言ふ迄もない。夜盜なるときは何物をも得ずして逃走しても 1200 din. (30 sol.) の責あるものとせられた (同條 § 6)。

若し盜犯者が非自由人たる奴たりしときは、自由人が 15 sol. を支拂ふべき事件たるに於ては、奴をベンチの上に延ばして置いてその背に 120 の笞打を加へる (Lex Sal. 12 § 1; 40 § 1)。奴之を免れんとすれば 120 din. (3 sol.) を支拂はねばならぬ。價額賠償と拒絶贖罪金を支拂ふべきこと言ふ迄もない (同上)。若し主人がこれ等のものを支拂へば奴は笞打を免れる (Lex Sal. 40 § 2)。自由人が 35 sol. を支拂ふべき事件であれば、奴は先づ 120 の笞打を受けねばならぬ (同條 § 3)。それによつて白狀すれば、奴は去勢せらるゝか又は 6 sol. を支拂はねばならない。主人はその價額賠償と拒絶贖罪金とを支拂はねばならぬ。

い (Lex Sal. 12 § 2; 40 § 4)。120 打つても白状しないので拷問者が更に拷問を續行せんとせば、その者は奴の主人に擔保を提供すべく、斯くして拷問せるにより白状すれば奴は拷問者の有となり、主人は全く責を免れる (Lex Sal. 40 § 4)。犯人が婢女なるときは去勢に代へて 240 din. (6 sol.) か又は 240 の管打を科する (同條 § 11)。奴が居るに拘はらず拷問の爲に引渡すことを拒めば、原告は直ちに七夜の期限を定めて猶豫する旨を言ふ (同條 § 7)。七夜の間に引渡さぬときは更に七夜の期限を定めて引渡を迫る (同條 § 8)。斯くて十四夜を終るもなほ主人が奴を引渡さぬときには、その主人は恰も奴が自由人たりしが如くにその贖罪金を自ら支拂ふ義務を負ふ (同條 § 9)。奴が居らぬときには、原告は三人の證人と共に、七日の間に奴を引渡すべきことを告知 (請求) する。同様にして三回即ち 21 夜の後になほ引渡さぬときは、上述の如く主人責あることゝなる (同條 § 10)。奴の犯行が、自由人ならば 45 sol. の罰を受くべきものたりし場合には、自白あらば死刑となつた (同條 § 5)。

盜品の種類によつても亦 Lex Salica は贖罪金の額を定めて居るのであるが、それは家畜、船、農作物、垣根その他の物に及び、又使用盜に及んでゐる。殊に家畜については牛・馬・豚・羊・山羊・鹿・犬・鷹・鵝鳥・蜜蜂等に分ち、その各々について更に種類を分ち盜取方法によつて區別を立て詳細を極めてゐる。今これ等につきこの順序によつて簡単に述べて見やう。

盗まれたるものが乳呑の仔牛ならば價額賠償と拒絶贖罪金との外に 120 din. (3 sol.) の責あり (Lex Sal. 3 § 1)、一年又は二年のものならば同じく 600 din. (15 sol.) の責あり (同條 § 2)、成長し切つた牡牛竝に經産の牝牛ならば同じく 1400 din. (35 sol.)、群を率ゐる牡牛ならば同じく 1800 din. (45 sol.)、三村の牝牛群を率ゐるものならばその三倍の責ありとせられる (同條 §§ 3—5)。十二匹も居る群の牛を盗み一匹も残存せざるときには同じく 2500 din. (62½ sol.) の責ありとせられ、二十五匹も居る群の牛を盗み一二匹残存せる場合亦同じ (同條 § 6 ; § 7)。

馬の足枷を盗める者は、價額賠償竝に拒絶贖罪金の外に 120 din. (3 sol.) の責があり、因つて馬が喪はれたるときには馬の價額も賠償せねばならぬ (Lex Sal. 27 § 3 ; § 4)。挽馬を盗めば價額賠償竝に拒絶贖罪金の外に 1800 din. (45 sol.) の責あり (Lex Sal. 38 § 1)、牡馬を一群の即ち十二匹の牝馬と共に盗めば同じく 2500 din. (62½ sol.) の責あり (同條 § 3)、數少きも七匹迄の群なるとき亦同じ (同條 § 4)。但し牡馬のみを盗みたるときには 1800 din. (45 sol.) の責あるのみ (同條 § 2)。一匹の孕める牝馬を盗めば價額賠償竝に拒絶贖罪金の外に 1200 din. (30 sol.) の責があり (同條 § 5)、一年の仔馬を盗めるときには同じく 600 din. (15 sol.)、乳兒期の仔馬ならば 120 din. (3 sol.) のみの責がある (同條 § 6 ; § 7)。

盗品が豚なるとき、乳呑の仔豚一匹ならば、そして厩から盗

んだ場合には 120 din. (3 sol.)、乳離れしたるものを野外で盗めば 40 din. (1 sol.) の責ありとせられる (Lex Sal. 2 § 1; § 2)。但し仔豚を豚群中より盗みたる時は價額賠償と拒絶贖罪金との外に 600 din. (15 sol.) の責ありとせられる (同條 § 8)。一年の豚を盗みたる時には同じく 120 din. (3 sol.) の責ありとせられ、二年のものなら同じく 600 din. (15 sol.) とせられる (同條 § 4; § 5)。二匹迄は同様 (同條 § 6)。三匹以上六匹迄は同じく 1400 din. (35 sol.) の責ありとせられ (同條 § 7)、二十五匹居つた群の全部を盗めば同じく 2500 din. (62½ sol.) の責あり (同條 § 14)。若し盗み残りが二十五匹以上あれば 1400 din. (35 sol.) にて足るが (同條 § 15)、五十匹以上盗めばたとへ幾匹かが残存してゐても 2500 din. (62½ sol.) の責ありとせられる (同條 § 16)。盗まれた豚が屠殺用の厩舎豚なるとき、一年未滿たりとも價額賠償と拒絶贖罪金との外に 120 din. (3 sol.) の責ありとせられ (同條 § 9)、一年を経たるものならば同じく 600 din. (15 sol.) の責ありとせられ (同條 § 10)、飼野猪ならば同じく 700 din. (17½ sol.) の責ありとせられ (同條 § 11)、被ひ清められたる去勢豚なるとき亦同じ (同條 § 12)。未だ被ひ清められざる時は同じく 600 din. (15 sol.) の責あるのみ (同條 § 13)。若し豚の群の鈴を盗みたる時には價額賠償と拒絶贖罪金の外に 600 din. (15 sol.) の責ありとせられる (Lex Sal. 27 § 1)。

盗品が羊なるとき、乳呑の仔羊ならば 7 din. の責のみを生

じ (Lex Sal. 4 § 1)、一年又は二年の去勢羊ならば價額賠償と拒絶贖罪金の外に 120 din. (3 sol.) の責が生ずる (同條 § 2)。三匹以上を盗めば同じく 1400 din. (35 sol.) の責が生じ (同條 § 3)、40 匹を超ゆるに至れば同じく 2500 din. (62½ sol.) の責が生ずる (同條 § 4)。

盜品が山羊なるとき、三匹迄ならば價額賠償竝に拒絶贖罪金の外に 120 din. (3 sol.) の責を生じ、それを超ゆれば 600 din. (15 sol.) の責が生ずる (Lex Sal. 5 § 1 ; § 2)。

狩獵用に飼ひ馴したる有用なる大鹿を盗み又は殺したる者は 1800 din. (45 sol.) の責ありとせられ (Lex Sal. 33 § 2)、それ以外の大鹿なるときには 1400 din. (35 sol.) の責ありとせられる (同條 § 3)。小家畜を盗む者あらば 120 din. (3 sol.) の責ありとせられ (Lex Sal. 27 § 2)、牧羊犬を盗み又は殺したる者は價額賠償竝に拒絶贖罪金の外に 120 din. (3 sol.) の責ありとせられ (Lex Sal. 6 § 2)、先導獵犬を盗み又は殺したる者は同じく 600 din. (15 sol.) の責ありとせられる (同條 § 1)。狩獵の獲物を盗めば、同じく 1800 din. (45 sol.) の責ありとせられる (Lex Sal. 33 § 1)。

鷹を木から盗んだ者は價額賠償と拒絶贖罪金の外に 120 din. (3 sol.) の責があり、それを竿から盗んだ者は同じく 600 din. (15 sol.) の責があり、閉鎖せる場所から盗んだ者は同じく 1800 din. (45 sol.) の責ありとせられる (Lex Sal. 7 §§ 1—3)。鵝鳥を

一匹盗んだ者は同じく 120 din. (3 sol.) の責ありとせられる (同條 § 4)。

蜜蜂の蜂房を盗む者あるとき、若し屋根を有し閉鎖せられたる場所から盗みたるときには、價額賠償並に拒絶贖罪金の外に 1800 din. (45 sol.) の責ありとせられ、戸外に於てそれのみ在る場所から盗みたる時亦同じ (Lex Sal. 8 § 1; § 2)。屋根なき蜂房を盗む者あり、なほ幾個かを盗み残せば、たとへ六個を盗むも同じく 600 din. (15 sol.) の責あるのみとせられるが、七個以上に及べば、たとへ幾個かを盗み残すも 1800 din. (45 sol.) の責ありとせられる (同條 § 3; § 4)。

Lex Salica には盜罪の對象として船が現はれてゐる。こゝに船とは、今日の航海船の如きものに非ず櫓櫓舟に比すべきものであつたことは言ふ迄もない (商法 538 條、改正商法 684 條第二項)。若し人が船を所有者の意に反して浮べ流失せしめたる時には 120 din. (3 sol.) の責ありとせられ (Lex Sal. 21 § 1)、船を盗んで取押へられたるときは 600 din. (15 sol.) の責があり、錠のかゝつた船を盗めば 1400 din. (35 sol.) の責があり、修繕の爲に繫留してある端艇を錠がかゝつてゐるに拘はらず盗みたる者は 1800 din. (45 sol.) の責あるものとせられた (同條 §§ 2—4)。孰れの場合にも價額賠償並に拒絶贖罪金は科せられてゐない。

農作物を盗む者は比較的軽く扱はれてゐる。甜菜畑・豆畑へ

侵入して盗む者は 120 din. (3 sol.) の責ありとせられ (Lex Sal. 27 § 7)、亞麻を馬背又は手押車程盗めば價額賠償竝に拒絶贖罪金の外に 600 din. (15 sol.) の責あるも (同條 § 8)、自分で背負へる程度のものを盗んだ場合は同じく 120 din. (3 sol.) の責を負ふ (同條 § 9)。他人の秣場の草を刈つても骨折損たるに止まるが、唯それを持去れば同じく 1800 din. (45 sol.) の責ありとせられ、若しその量が自分で背負へる程度ならば唯 120 din. (3 sol.) の責あるのみであつた (同條 § 10; § 11)。他人の葡萄山で葡萄を拾ひ集めて盗むと 600 din. (15 sol.) の責あり、それを家へ運んで荷を下せば價額賠償竝に拒絶贖罪金の外に 1800 din. (45 sol.) の責ありとせられる (同條 § 12; § 13)。穀物の盗取せられたる場合も亦之に準ずる (同條 § 14)。但し水車小屋から盗まれたる場合には、犯人は所有者に 15 sol. を支拂ふの外、粉挽業者に 600 din. (15 sol.) を支拂ふべきであつた (Lex Sal. 22)。他人の植林したる林を毀ち又は燒却せる者は 600 din. (15 sol.) の責があり、かゝるものをその片側丈け枝降しすれば 120 din (3 sol.) の責があり、植林を盗めば同額の責あるものとせられた (Lex Sal. 27 §§ 15—17)。但し一年以下の樹木ならば全く其責が無い (同條 § 18)。垣根の物體を盗み又は垣根を破壊したる者は、その個所の大さ相當大なときは 600 din. (15 sol.) の責ありとせられる (Lex Sal. 34 § 1)。鰻捕獲用の^{サナ}の築を盗めば 1800 din. (45 sol.) の責ある外、價額賠償竝に拒絶贖罪金の責があるが、

定置網、三目網、袋網等の漁具を盗めば單に 600 din. (15 sol.) の責ありとせられた (Lex Sal. 27 § 19; § 20)。

馬の使用盜に關しても Lex Salica は規定を置き、所有者の意に反して他人の馬を乗り廻せば 1200 din. (30 sol.) の責あるものとした (Lex Sal. 23)。又盜みの爲に他人の庭に侵入したる者は價額賠償並に拒絶贖罪金の外に 600 din. (15 sol.) の責ありとせられた (Lex Sal. 27 § 6)。

盜まずと雖も財産を破壊する等侵害を加へたる場合には Lex Salica は之を贖罪すべきものとし、人の爲せる侵害と動物の爲せる侵害に分つて規定を設けてゐる。錠前ある機織小屋を破つて開けば 1800 din. (45 sol.) の責あり、之なきものを破つて開けば 600 din. (15 sol.) の責ありとせられる (Lex Sal. 27 § 21; § 22)。他人の穀物畠が既に發芽してゐるのに、その上を^{マゲツ}耙を引ずり又は手押車で横切るが如き事を爲せば 120 din. (3 sol.) の責ありとせられ、既に閉鎖したる畠を横切れば 600 din. (15 sol.) の責ありとせられた (Lex Sal. 34 § 2; § 3)。他人の畠を所有者の意に反して犁けば同上の責があり、その上に種子を播くに至れば 1800 din. (45 sol.) の責あるものとした (Lex Sal. 27 § 23; § 24)。

牛・馬其他の家畜が自分の穀物畠に居るのを見ればそれを取押へて置き賠償を求めるか又は逐ひ出すべきであつて傷害してはならない。若し傷害し、そして自白すれば、彼はその價額

を賠償してその被害動物を自分の方へ引取ることが出来る。然るにそれを自白しなかつた場合には 600 din. (15 sol.) の責ありとせられる (Lex Sal. 9 § 1)。かゝる事情の下に在らずとも、若し不注意によつて家畜を侵害するに至つた場合には全く上述と同一の取扱を受ける (同條 § 3)。但し他人の馬の毛を刈込んだに過ぎなければ 120 din. (3 sol.) の贖罪金で済むのであつて (Lex Sal. 38 § 8)、他人の馬の死亡せるものゝ皮を所有者の意に反して剥ぎ、その旨を自白すれば、價額を賠償するを以て足るが (Lex Sal. 65 § 1)、自白しない場合は價額賠償と拒絶贖罪金との外に 1400 din. (35 sol.) の責が生ずる (同條 § 2)。

牛馬その他の家畜が他人の穀物畠を荒せば、被害者側ではその加害家畜を取押へて置き賠償を求めることができる。従つて家畜の所有者はその損害と之に加へて 10 din. を被害者に支拂ふ要があり (Lex Sal. 9 § 5a)、又抑留に際し又は抑留せられたるものを暴力を以て奪還するの舉に出づれば 1200 din. (30 sol.) の責を生ずる (同條 § 5)。加害家畜の番人たりし者が加害に關して否認せるに而もそれが證明せられたるときには 600 din. (15 sol.) の責がある (同條 § 4)。敵意又は傲慢を以て他人の垣根を開き畠、牧場、葡萄畑その他へ家畜を放牧すれば、彼は評價損害と 1200 din. (30 sol.) とを支拂はねばならない (同條 § 5b)。盜牧する意思で自分の家畜を他人の穀物畠へ放牧すれば 600 din. (15 sol.) の責ありとせられる (Lex Sal. 27 § 5)。

放火に關する Lex Salica の規定を見るに、その責任は可なり嚴重に追及せられてゐる。就寢中の人々ある家屋に放火し、よつて死者ありたるときには、犯人は 2500 din. (62½ sol.) の責を負ひ、その上各生命に對して 200 sol. を、又家屋の所有者に 8000 din. (200 sol.) を支拂ふべきものとせられる。言ふ迄もなく被害者自由人たる場合を指してゐる (Lex Sal. 16 § 1)。編んで作れる離家に放火したる者は 2500 din. (62½ sol.) の責あり (同條 § 2)、穀物を容れある物置又は納屋^{ナヤ}に放火したるとき亦同じ (同條 § 3)。豚の居る豚小屋、牛の居る牛小屋に放火したるときは、價額賠償と拒絶贖罪金の外に 2500 din. (62½ sol.) の責ありとせられ (同條 § 4)、垣根又は逆茂木に放火したる者は 600 din. (15 sol.) の責あるものとせられた (同條 § 5)。

Lex Salica の Novellae に至ると盜罪に關して更に規定を加へ、獵用の足枷を盗みたる者、又船から網・籠等を持去れば 1200 din. (30 sol.) の責ありとした (Nov. II, 3 § 1)。船又は網から魚を盗めば 600 din. (15 sol.) の責を問はれた (同條 § 2)。又、矢の中つた獸等を横取りし、獲物を運搬具から盗み又は農場から盗んだ者は 1200 din. (30 sol.) の責ありとせられた (同條 § 3)。一腹仔の中から一疋の乳兒期の仔豚を盗めば 400 din. (10 sol.) の責を生じた (同條 § 4)。若し豚群の途を迷はせた者は 600 din. (15 sol.) の責を生ずるに至る (Nov. II, 6)。他人の船を暴力を以て奪へば 600 din. (15 sol.) の責ありとして舊規定を繰返しつゝ

も暴力といふ要素を加へた (Nov. II, 7)。他人の所有地から掠奪し又は收獲せる者あるとき、その犯人は 600 din. (15 sol.) の責ありとせられた (Nov. II, 11 § 1)。否、他人の畠から許可なしに落穂を拾へば 600 din. (15 sol.) の責ありとせられてゐる (Nov. II, 10)。一般に他人の物を持去り自分のものなりと稱へ、而もその事を證明し得ぬときには 15 sol. の責あるものとせられた (Nov. II, 12)。他人の所有地又は配當地 (當籤地) を耜を以て又は犁を以てうなひ起せば、その犯人はやはり 600 din. (15 sol.) の責あるものとせられた (Nov. II, 11 § 2)。他人の伐採せる建築用材を森から盗んだ者は 600 din. (15 sol.) の責ありとせられた (Nov. II, 6)。又、他人の庭の入口や垣を破壊すれば同額の責ありとせられた (Nov. II, 13)。他人の家を毀ち、若しその家に支柱ありたる場合には、加害者は 45 sol. の責あるものとしてゐる (Nov. V, 9 § 1)。

Capitulatio de partibus Saxoniae に至ると、他の事項に關すると同様、その處置は盜犯竝に放火に於ても強化せられ、殊に教會に對してそれが行はれれば死刑を科せらるべきであつた。暴力的に教會に侵入し、暴力を以て又は竊に盜取すれば死刑、放火して教會を焼けば死刑とせられた (CdpS. 3)。Capitulare Saxonicum は放火に關して規定を置き、叛亂等ありて之を防止するに燒却の外方法なき場合には、集會せる村人一致の意見によつて之を爲すことを得るが、それ以外の場合例へば不和又は痢

癪によつて放火することは禁ぜられ、之を犯せば 60 sol. の責あるものとした (Cap. Sax. 8)。

Lex Saxonum に至ると盜犯の殆んど凡ての場合に死刑が科せられてゐることは嘗て述べた(註一)。教會内で盗みたる場合のみならず (Lex Sax. 21)、馬を盗みたる時 (Lex Sax. 29)、2 sol. の價值ある四歳牛を夜盜したるとき (Lex Sax. 34)、機織小屋で何かを盗みたる時 (Lex Sax. 33)、他人の家に掘鑿又は破壊によつて侵入し 2 sol. の價あるものを持去りたる時 (Lex Sax. 32)、等である。最後の場合に當つて現場で犯人殺害せらるゝも賠償は行はれない (Lex Sax. 32)。蜂房を中庭より盜めば死刑となるが (Lex Sax. 30)、それを中庭以外で盜めば九倍を以て贖罪せらるべく (Lex Sax. 31)、3 sol. の價值ある品を薄暮又は夜盜めば死刑を科せられるが (Lex Sax. 35)、3 sol. より 1 din. 丈けでも少い物を盜んだ者は九倍を以て贖罪し、その上犯人貴族ならば 12 sol. 自由人ならば 6 sol. 半自由人ならば 4 sol. の平和金(罰金)を支拂ふべきものとせられてゐる (Lex Sax. 36)。共謀者亦同じ (同條)。他人の家に夜又は薄暮故意に放火したる者は死刑を科せられた (Lex Sax. 38)。非自由人たる奴が主人の命に基かずして盜罪を行ひたる場合の主人の責任に關しては殺人の場合に關し述べたる所と同じ(註二)。

(註一) 45 頁參照。

(註二) 22 頁參照。

Sachsenspiegel に於ても盜犯者は原則として死刑なることは嘗て述べた(註一)。但し、それが日中而も村落に於て行はれたるときはその盜品の價額が三シリングより少きときに限り、膚髮の刑又は三シリングの罰金により釋放せられ得る (Ssp.-Landrecht II, 13 § 1)。穀物を夜間竊盜する者は絞首、晝間ならば斬首(註二)となる (Ssp.-Landrecht II, 39 § 1)。唯鳥に在るものを家畜に食はしめる程度ならば價額により賠償すれば足る (同條 § 2)。馬が乗潰れてしまつたときには道傍の穀物を食はすことは許される。但し道より一步にて達する範圍に限定せられる (Ssp.-Landrecht II, 68)。刈りたる草伐りたる木を盜取すれば、夜間ならば絞首せらるべく、晝間ならば膚髮の刑となる (Ssp.-Landrecht II, 28 § 3)。竊取又は強盜せられたる物は必ず贖罪金を添へて返還せらるべく、若し返還し得ぬときには喪失者の評價に従つて支拂はるゝことゝなり、若し之を不當とするときには支拂義務者は宣誓して減額せしめ得る (Ssp.-Landrecht III, 47 § 1)。場合によつては代品を以て返還し得る。例へば囀る鳥、獵禽、獵犬等の如し (同條 § 2)。盜品と指摘せらるゝものにつき追奪擔保者を缺くに至れば、その現保有者が盜者として財物を引渡し、その上贖罪金を支拂はねばならない。逆に盜品追及を爲したる者が敗訴するに至つた場合亦同じ (Ssp.-Landrecht II, 36 § 5)。或者が入手したるものが裁判により不法なるものとなつた場合には、彼は贖罪金を添へてそれを返還せねば

ならない (Ssp.-Landrecht III, 43 § 1)。然し入手が適法ならば返還が遅延するも贖罪金を支拂ふを要しない (同條 § 2)。漂着物を隠匿すれば返還と共に贖罪金と罰金とを支拂はねばならぬが、罰は決して生命身體名譽に及ぶことはない (Ssp.-Landrecht II, 29)。但し、拾得物を保持する者が拾得の事實を否定すれば盜罪と看做される (Ssp.-Landrecht II, 37 § 1)。

(註一) 45 頁参照。

(註二) 絞首は斬首より重き刑罰とせられた。後者は三本柱の Galgen での晒を伴つた。なほ Schröder-v. Künßberg: ibid. S. 831 参照。

上段に於て贖罪金と稱するは、被害者の生來身分に従つて定まれる一定の額である。諸侯・自由貴紳・參審自由人の贖罪金の額は同額であり三十シリングとせられる。但し前二者には金^{キン}を以て、後者には一般の貨幣を以て支拂はるべきものなりとして區別してゐる (Ssp.-Landrecht III, 45 § 1)。小前百姓竝に高持百姓の贖罪金は十五シリングであり (同條 § 4)、水呑百姓のもの亦同額である (同條 § 6)。半自由人のものは二十シリング六プフェニヒーヘラとせられてゐる (同條 § 7)。日傭人のものは二個の毛織の手袋と一個の肥料熊手とであり (同條 § 8)、僧侶の子竝に婚外子には二歳の牡牛が牽引し得る容積の乾草が贖罪金として與へられ (同條 § 9)、藝人や非自由人には人の影法師が與へられ (同上)、決闘業者竝に彼等の子供には太陽に向つての決闘楯の一閃が與へられる (同上)。二個の筭と一個の鋏とが、

竊盜強盜その他の事由によつて權利能力喪失者となれる者の贖罪金である (同上)。

他人有の地面に在る木を伐り又は草を刈る者又は他人有の水面で漁る者があれば、その者は三シリングの贖罪金の外に損害を賠償すべきであり (Ssp.-Landrecht II, 28 § 1)、特に植栽せられたる木を伐り、果實ある木を伐りその果實を採取し、又は掘鑿せられた池で漁る者は三十シリングの贖罪金の責がある (同條 § 2)。かゝる者を現場で發見したる者は損害擔保の爲に裁判官の許可なくして差押逮捕を爲して差支なきものとせられる (同上)。道なき耕作地上を通過する者あらば、その者は各車輪につき一プフェニヒを、騎乗ならばその半分を贖罪金として支拂ふ必要がある。若し既に播種後ならば外にその實損を賠償する。それ等の擔保の爲に被害者は加害者を差押へ得るのであるが、若し加害者之を妨げれば被害者は叫喚告知を爲して助力を求める。その叫喚告知の費用三シリングは加害者之を支拂ふ責がある (Ssp.-Landrecht II, 27 § 4)。他人の土地たることを知らずして耕したる者は何等の不利益を科せられない (Ssp.-Landrecht III, 20 § 1)。土地の引渡を受けて自地なりと考へ耕作したる者が裁判の結果第三者の有たること明らかとなり之を引渡すに至れば、その第三者はその耕作者の勞働に對して何等賠償の責任は無い。かへつて初め土地の引渡を爲した者が損害を賠償せねばならないのである (Ssp.-Landrecht II, 46 § 1)。既に

播種してある他人の土地を耕す者は、贖罪金を支拂つた上に損害を賠償すべきである (同條 § 4)。

Sachsenspiegel は城兵が強盜を行ひたる場合に關し特則を置いた。その城兵又は城兵の屬する城の城主は次の如くすることによつてその責を免るべきこととした。即ち、告訴人と裁判官の使者六人とで強盜品を搜索に城に上つて來たときに搜索を許したる場合 (Ssp.-Landrecht II, 72 § 1)、強盜したる者がその城より出で且城に戻つたとて城主又は城兵の内の或者を指摘して責められたとき、その被疑者が聖物にかけて誓を爲したる場合 (同條 § 2)、人を指摘せずして城全體を相手取つて訴へられたるとき城主が宣誓を爲したる場合 (同條 § 4)、等である。強盜者が城に歸還せざる場合には城主責を免るゝことは言ふまでもない (同條 § 5)。搜索を拒めば平和喪失となり (同條 § 1)、城主が宣誓を爲さねば法律に従つて自ら損害賠償を爲すべきであつた (同條 § 4)。

五 贖 罪 金 (其 三)

約束違背に基く贖罪金、竝に王權に關係ある事項殊に裁判とその執行等に關する贖罪金の制度を、此處に考察してみやうと思ふ。偽證に關する贖罪金も亦從つて此處に包含せられる。

約束違背に關して *Lex Salica* は特に規定を置いてゐる。自由人又は半自由人が誠實に確約したるに拘はらず、四十日以内又は特約したる日に、證人又は評價人と共に債權者の家に來なければ、債務の外になほ 600 din. (15 sol.) の責ありとせられる (*Lex Sal.* 50 § 1)。而もなほ支拂はざれば *thunginus* (百人組の長) の面前で所定の文言を述べ、手續を履んで支拂要求を陳述する。その際擔保提供もなかりし旨を述べねばならぬ。斯くして證人と共に債務者の家に至り請求を爲すもなほ支拂はなければ、次の來訪期日を定める。その際には 120 din. (3 sol.) の責が從來のものに附加せられる。これを三週中に三回繰返して行ふ。^{オコナ}行つて 360 din. (9 sol.) の責を増す事となる (同條 § 2)。斯くするもなほ支拂はざれば、その地方の守護 (*Graf*) の面前に至つて手續を履む。*Graf* は七人の *rachineburgius* (陪審員) と共に債務者の家に赴く。そして所定の文言に從つて支拂へと命令する。在宅の(又は不在の)債務者が之を肯んぜずして支拂はざれば、*rachineburgius* の評價に從つて債務者の財産中より所定の額丈け持去る。債務者より別に平和金の支拂が爲されて

るれば、これは全額債権者に入るが、然らざる場合には三分之二が債権者に入り、残る三分之一は Graf に入ることとなる(同條 § 3)。Graf が故なくかゝる助力を爲すことを怠れば死刑を科せられる。さもなければ身分所定の金額によつて贖罪すべきである(同條 § 4) (註一)。

(註一) 7 頁參照。

貸した物を返還せぬ者があれば、貸付人は證人と共に借受人の家に赴き、所定の文言を述べて請求を行ひ、若し返還せねば七夜を置いて三回繰返す。その度毎に 120 din. (3 sol.) が附加せられ 9 sol. の責を生ずる。然るになほ返還もせず又返還の確約もせねば、債務と 9 sol. との外に 600 din. (15 sol.) の責が生ずることとなる (Lex Sal. 52)。

Lex Saxonum に至る迄のものには特に約束違背による贖罪金の制度は見出し難い。Sachsenspiegel に於ては數多の債權關係一般に關する規定の外(註一)、特に約束違背による贖罪金の規定と稱すべきものはないが、少くとも實損を賠償する規定は二三存在する。簡単に之を述べれば、往來通行に關し特に護衛料を支拂つて護衛を特約したる場合には、之を受けたる者は、生じたる損害を支拂ふ責任があり (Ssp.-Landrecht II, 27 § 2)、他人の爲に確約したる平和を破りたる者は、因つて生じたる損害を賠償すべく (Ssp.-Landrecht III, 9 § 2)、貸付又は質入せられたる物は完全なる姿に於て返還せらるべきであり、然らずん

ばその價額に従つて賠償せられる (Ssp.-Landrecht III, 5 § 4)。馬又は衣服を貸與せる者あるとき、借受人が期日に至るも返却せぬときには訴へらるべく、若し損傷あらば賠償せらるべきである (Ssp.-Landrecht III, 22 § 1)。そしてかゝる抑留物はそれを發見次第、貸付人は盜品追及手續によりそれを奪還し得る (同條 § 3)。馬其他の家畜が質入期間内に斃死すれば、質取人はそれに關して自己に責なき旨を證明し、且つ權利能力にかけて宣誓を行つて賠償責任を免れ得る。而して特約なき限りは被擔保債權は消滅するに至る (Ssp.-Landrecht III, 5 § 5)。

(註一) Ssp.-Landrecht I, 65 § 4; II, 38; III, 3; Lehnrecht 67 § 3; 68 § 9; § 10 等は損害賠償に關係するも、なほ今これに觸るゝことを得ない。

裁判に關しては、訴の提起、召喚、出頭、裁判自體に關するもの、不法差押等が擧げられる。先づ出頭に關する定を見るに Lex Salica は裁判所へ適法に召喚せられたる者が正當の事由なくして出頭せざれば 600 din. (15 sol.) の責ありとし (Lex Salica 1 § 1)、他人を召喚したる者 (即ち原告) が自ら不參したるときは正當の事由なき限り 600 din. (15 sol.) の責あり且つそれは被告に入るべきものとした (同條 § 2)。國事に携れる者は召喚せらるべきではない。即ちそれは正當な事由となる (同條 § 4)。但し郡 (gau, pago) 中で自用を行つてゐる場合はそれに入らぬ (同條 § 5)。證人として適法に召喚せられたる者が出頭せぬ場合には、その者は 600 din. (15 sol.) の責ありとせられ (Lex

Sal. 49 § 2)、たとへ出頭しても證言拒絶を爲せば同額の責ありとせられた(同條 § 3)。期日に出頭する事を拒絶し、又は出頭するも陪審員によつて命ぜられたる事項(贖罪金支拂、盟神探湯、誓約等)を爲すことを怠れば、彼は國王の面前に召喚せられる。所定の手續を経て三度召喚が行はれ而もなほ出頭せざれば、國王はその者をその社會より除外する。即ち「八分」する。彼を宿泊せしめても食事を給しても、それをたとへ妻が行つても 600 din. (15 sol.) の責あることとなる。但し被告が本來支拂ふべかりしものを支拂へば此禁は解かれる (Lex Sal. 56)。Lex Salica の増補は、従者たる身分を有する者の訴に關し特則を設け、従者が従者に對して法定の方法に従はずして訴を提起し又は保證人を乞へば 15 sol. の責あり、又従者が従者に對して宣誓を行へば 15 sol. の責ありとした (Nov. V, 8 § 2)。そして、正當なる事由の種類を、國事に携はれる場合の外に、家が焼けたとき、病氣により制せられてゐるとき、竝に親族(父、母等)の死體を家の中に有してゐるときに迄擴張した (Nov. VI, 1)。Capitulare Saxonicum に至れば、若し貴族より召喚を受けて裁判所へ出頭すべき場合に懈怠すれば、その者は 4 sol. の責あるものとし、自由人よりの場合には 2 sol. 半自由人よりの場合は 1 sol. の責ありとした (Cap. Sax. 5)。

Sachsenspiegel に至ると訴の提起に關して特に規定を設け、非現行犯の場合には、規定ある場合は別として一般には叫喚告

知の方法で訴ふべきではなく、若し敢て之を爲せば損害を賠償すべきことゝした (Ssp.-Landrecht II, 64 § 5)。管轄裁判所に非ざる裁判所へ訴へたる者は、裁判官に罰金を支拂ひ相手方に贖罪金と損害とを支拂はねばならない。例へば世俗裁判所へ訴ふべきことを教會裁判所へ訴へたる場合の如し (Ssp.-Landrecht III, 87 § 1)。訴により召喚せられて相手方が出頭せるに、若し原告が出頭せず又は出頭するも訴を遂行せざるときは、原告は裁判官に罰金を支拂ひ相手方に贖罪せねばならない (Ssp.-Landrecht II, 8)。遂行して而も敗訴したるときはその故を以ては何等の不利益を科せられない (同上)。又相手方が排證宣誓を行つたので主張が貫徹せられなかつた場合でも同様である (Ssp.-Landrecht I, 62 § 4)。財物請求の訴に關しても同様であるが、若し請求者(敗訴者)が占有を有して居る場合は罰金と贖罪金との責を伴ふ (Ssp.-Landrecht I, 53 § 2)。訴訟が續行せらるゝ場合等に於て被告を出頭せしむることを保證したる者は、それを果し得なければ、彼は彼の身代金丈けの額を支拂はねばならない (Ssp.-Landrecht I, 65 § 3)。

判決前の證據調に於て偽證したる者あるときには、Lex Salica は 600 din. (15 sol.) の贖罪金と外に價額賠償と拒絶贖罪金と訴訟費用 (causa) とを支拂ふ責任がありとし、宣誓補助者たるときはこれは各人 5 sol. に減額せられた (Lex Sal. 48 §§ 1—3)。又宣誓を爲す義務ありて之を拒みたる者は 15 sol. を以て贖罪す

べきであつた (CdpS. 32)。裁判に當つて盟神探湯を爲さんことを要求せられたる者が、若しそれを爲すことを免れんとすれば、宣誓補助者を立てた上に、請求額が 600 din. (15 sol.) なるときは 120 din. (3 sol.) を、請求額が 35 sol. なるときには 240 din. (6 sol.) を提供せねばならない。それ以上の請求たる場合も上記の額に止まる。但し身代金の請求即ち 200 sol. 600 sol. 1800 sol. 等の請求なるときには 1200 din. (30 sol.) を提供することゝなる (Lex Sal. 53 §§ 1—5)。裁判は本來 *rachineburgi* (陪審員) によつて行はれる。陪審員が判決を宣告せぬときには、原告は法定の文言を述べて之を促し、而もなほ彼等が爲さぬときには彼等七人は各自 120 din. (3 sol.) の責ありとせられる。それでもなほ宣告せず又は此 3 sol. の支拂を確約せぬときには、彼等各自は 600 din. (15 sol.) の責ありとせられる (Lex Sal. 57 § 1; § 2)。Lex Salica の Novellae は、神判以外に於て即ち陪審の判決に代るべきものとしてより以外に、熱湯判斷を他人に要求したる者は 600 din. (15 sol.) の責ありと定めた (Nov. II, 4)。更に詐り宣誓したる旨が證明せられれば偽證者は 15 sol. の責ありと定め (Nov. II, 15 § 1)、又、それが證明せられぬと告發者が 15 sol. の責ありとせられる (同條 § 2)。尤も告發者は決闘によつて定めんことを主張し得た (同上)。偽證被疑者は盟神探湯を行つて手が焼け爛れれば上記の科を受けるが、若し何等の障害なきときにはその責なきものとせられる (Nov. II, 16)。

Lex Saxonum に至ると處置は嚴酷となり、たとへ知らずして誤り誓へる場合たりともその宣誓に用ひたる手は切斷せらるべきものなりとしてゐる (Lex Sax. 22)。知つて偽證すれば死刑 (Lex Sax. 21)。

Sachsenspiegel に至ると、Karl 大王前後に於て南方より傳播し來れる代辯者 (furisprecho, vorspreke) 制の利用が盛んとなりし結果、特にそれに關する定が置かれてゐる。代辯者の言によつては、原告竝に被告は、それを是認せざる限り損害を及ぼさるゝことは無いとせられる (Ssp.-Landrecht III, 14 § 1)。蓋し原告又は被告は自己の代辯者の言を聴き、それが自己に有利である場合にのみ之を是認して自己の言として利用すれば足るのであるが故である。代辯者も亦罰金竝に贖罪金を支拂ふ。從つて遅くとも若しそれ等が科せらるべき場合に至れば、代辯者は、相續財産を有するか然らずんば保證人を立つるを要することとなる (Ssp.-Landrecht I, 61 § 4)。

Sachsenspiegel に至ると判決の非難に關する制も明定せられ、それに關する贖罪金の定も爲されてゐる。或判決作成者 (裁判官とは別人) の作成したる判決を非難する者は自ら正しとする判決を作成して自分の主張を貫徹しなければならない。若し之を貫徹し得なければ、彼は裁判官には罰金を拂ひ、前判決作成者には贖罪金を支拂ふ必要がある。而も裁判官がその爲に使者を派遣した場合には、その旅の失費をも支拂はねばならない

(Ssp.-Landrecht II, 12 § 5)。非難せられたる者が非難者の判決を直ちに承服したるときには罰金も贖罪金も生じないのであるが (Ssp.-Lehnrecht 69 § 3)、若し之に承服せざるときには、互に宣誓補助者を利用して數を以て争ひ、敗れたる者は罰金と贖罪金との責あることとなる (Ssp.-Landrecht 12 § 8)。若し判決の非難が判決に對する賛同後に行はれたるときには、賛同前相手方に相談の猶豫が乞はれてゐた場合は別とし、判決作成者の外なほ凡ての賛同者に贖罪金を支拂はねばならない (Ssp.-Lehnrecht 69 § 11)。判決の非難を爲す資格無き者が非難を爲すには、罰金竝に贖罪金支拂の爲に、有資格者を保證人に立てる必要がある (Ssp.-Lehnrecht 69 § 2)。

下級裁判官の許で應訴すべきに拘はず之を拒み、上級裁判官の許で應訴したる者は、原告に對し特別の贖罪金を支拂ふべきものとせられた。百姓代の裁判を拒み、上級裁判官の許で應訴したる者は三十シリングの贖罪金とせられてゐる (Ssp.-Landrecht III, 86 § 1)。

不法差押に關しては既に *Lex Salica* に規定が置かれてゐる。*Graf* (守護) に對し不法差押を爲す様に乞ひたる者は、欺罔差押と稱して 8000 din. (200 sol.) の責を負ふこととなる (*Lex Sal.* 51 § 1)。而して *Graf* がその乞に應じて債務額以上に其他不法なる執行を爲すに至れば、その *Graf* は生命を以て贖はねばならない。即ちその身分に應じたる額を以て贖罪すべきこととな

る (同條 § 2)。Lex Salica の Novellae は、訴へぬうちに、債務者に知らせずに、裁判官なしで即ち自力で差押を行へば、之を爲したる債權者はその債權を失ふこととなる。而も差押が不法に爲されば、法律に従ひ價額賠償の外に 15 sol. の責を差押者は負ふ (Nov. IV, 2)。Capitulaire de partibus Saxoniae も自力差押を禁じ若し之を侵せば過料 (baunum, Bannbuße) を支拂ふ責ありとしてゐる (CdpS. 25)。Sachsenspiegel も現行犯の場合、地代を借地人より取立つべき地主が行ふ場合等特別なる場合を除き (Ssp.-Landrecht I, 54 § 4; II, 27 § 4; 28 § 2; III, 20 § 2)、差押は裁判官の許可を受くるか又は裁判官の使者たる執行官 (vröne bode) によつて爲さるべきものとしてゐる (Ssp.-Landrecht I, 53 § 3; III, 56 § 2)。不法差押を爲せばその者の生命並に財産は剝奪せられることとなる。それが執行官により權限外に互り行はれたる場合亦同じ (Ssp.-Landrecht III, 56 § 2)。従つて贖罪金の定は無い。

最後に王權の發動に關する又は王權を背景とする贖罪金の制度を見やう。Lex Salica はそれが王權大ならざる時代に生じた法律なる關係上、かゝる規定は比較的少い。一二の規定を拾へば、國王からの書面により進發せんとし而もそれを裁判所で示す者に對して、國王の命令に反して之に抗議せんとする者は、8000 din. (200 sol.) の責ありとせられる (Lex Sal. 14 § 4)。王婢を姦淫したる者は一般の婢女を姦淫したる場合の倍額即ち

1200 din. (30 sol.) の責ありとせられる (Lex Sal. 25 § 4)。徒黨を組んで殺人を行ひたる場合に、被害者が國王の從者ならば一般人の三倍の身代金即ち 72000 din. (1800 sol.) の責ありとせられてゐる (Lex Sal. 42 § 1)。從軍中の者を殺したる場合亦同様である (Lex Sal. 63 § 2)。

Capitulatio de partibus Saxoniae に至ると教會竝に牧師に權力を與へるといふ建前によつて王權は非常に強化せられてゐる。例へば教會内に入りたる者は殺さるゝことなく、逐ひ出さるゝことなく、生命を脅かさるゝことが無い。然し出来る丈けは債務を果すべきであり、又國王に召喚せられゝば出頭すべきであるとせられてゐる (CdpS. 2)。Capitulare Saxonicum に至るとその卷頭に於て、國王の統制權(命令權) (bannum) に背く者あらば、その者がフランク人であらうとザクセン人であらうと 60 sol. を支拂ふべき義務あるものと定めた。そして 1000 sol. 迄の額を國王は定めることを得るとした (Cap. Sax. 9)。國王の使者が又は從者が殺されたるときには、一般の場合の三倍の身代金を生ずべしとし (Cap. Sax. 7)、更に進んで、死刑を科せらるべきやうな犯人が王權の下に在り又は保護を求めてその下に來た場合には、國王は之を引渡すことも出来るが、犯人をその妻・家族・財産と共に他地方又は國境地方へ移住せしむることも出来ることと定めた。その場合には犯人は死亡と看做されたのである (Cap. Sax. 10)(註一)。Lex Saxonum に至ると、死刑

の宣告を受けたる者は決して平和を有せず、たとへ教會へ逃げ込むも引渡さるべき旨を規定してゐる (Lex Sax. 28)。上述のものは未だ宣告を受けざるものであり、之は宣告を受けたものであるから両者は矛盾してゐない。Lex Saxonum は又軍隊から宮廷へ宮廷から軍隊への道に在る者に對して惡事を行へる者に對し、三倍の贖罪金を徴すべき旨を定めた (Lex Sax. 37)。これも亦王權の一表現である。

(註一) 日本養老律令中にも似たやうな制度が見られる。移郷即ち之である。賊盜律第十八條竝に獄令第十七條等參照

Sachsenspiegel に於ては、半フーフェ乃至三フーフェの土地を有する高持百姓の内から裁判官竝に參審員によつて選ばれたる執行官は (Ssp.-Landrecht I, 2 § 3; III, 45 § 5; 56 § 1; 61 § 3)、死刑の執行、當事者の召喚、逮捕差押等廣汎な權限を與へられてゐるのであるから (Ssp.-Landrecht I, 62 § 9; 63 § 5; III, 55 § 2)、その任務に背反する行爲不行爲ありたるときには特別な刑罰を科せられると同時に (Ssp.-Landrecht II, 16 § 4)、他方に於て執行官は通常の二倍の身代金竝に贖罪金を受けるのである。基準は彼の生來身分である (Ssp.-Landrecht I, 8 § 2)。

六 罰 金

贖罪金と罰金との関係は可なり複雑して居る。こゝに罰金とは、違法行為に基き國王其他の公權力者又は公共團體に支拂ふ金銭その他の物を指し、違法行為の被害者に對する贖罪金と區別する。罰金は古くは *fredus*, *fritus* (*Friedensgeld*) と稱せられた。例へば *Lex Salica* の中にも、國王の保護下に在る娘を略取すれば 2500 *din.* (62½ *sol.*) の罰金を科せらるべく (*Lex Sal.* 13 § 6)、一般に作業中の奴婢や鐵鍛冶・金鍛冶・豚追ひ・葡萄作り・馬丁等を殺し又は略取したる者は、價額賠償竝に拒絕贖罪金と 1200 *din.* (30 *sol.*) の贖罪金との外に、なほ罰金竝に復讐斷念金 (*faido*) として 1800 *din.* (45 *sol.*) を支拂ふべしとし (*Lex Sal.* 35 § 6 ; § 7)、誠實に確約したる債務を所定の期限に支拂はず、種々の手續の後 *Graf* (守護) が陪審員と共に債務者の家に赴き債務者の財産を陪審員の評價に従ひ差押沒收を行ふに至れば、その金額の三分之二は債權者に入るも三分之一は罰金として *Graf* に入るべしと定め (*Lex Sal.* 50 § 3)、盟神探湯を爲すべきときにそれを爲すに代へて金銭を以て免れたる場合、所定額を超えたる部分は *Graf* に入るべきものと爲し (*Lex Sal.* 53 § 2 ; § 4 ; § 6)、十二歳未満の小供が違法行為を犯せる場合には全然罰金を科せずと定めてゐる (*Lex Sal.* 24 § 5)。

Lex Salica の *Novellae* に於ては、偽證したる事明らかとな

ればその者は 15 sol. の刑罰 (multa) を科せらるべく、盟神探湯の結果その手に何等の障害なかりし時はかへつて告發者が 15 sol. の刑罰を受くべきものとした (Nov. II, 16)。こゝに刑罰とは亦上述の罰金と性質に於て變りがない。

本來罰金には、系統が二つあるのであつて、その一はその金額の提供によつてその者より裁判上剝奪されたる平和を回復する爲の、換言すればその村落生活よりの村八分を解除して貰ふ爲の代償であつたのであり、之を *fredus* と稱し、何等王權領主權等と關係なきものであつた(註一)。その二は國王の統制權又は命令權とも稱すべき *bannus* (*Bannrecht*) の系統に屬するものであり、それが裁判所に發動して、國王の命令違反を理由として科せらるゝ一定の金額を指した。そして多くは所犯の大小に依らずして寧ろ裁判所の審級によつて額が上下する方法が採られた(註二)。此 *fredus* は次第に *bannus* によつてその地位を奪はれる傾向を持つた。然しそれが實現せざる間に兩者は融合してその區別は失はれるに至り、或罰金が兩者の中の孰れの系統に屬するか容易に區別し得ざることとなる。Capitulatio de partibus Saxoniae に於ては、國庫に收入あるに際してはそれが *frido* であると *bannus* であるとその他のものであると問はず必ずその十分之一が教會に給付せらるべき旨を定めて居り (CdpS. 16)、兩者の區別が未だ消失して居らないことを示してゐるが、*Sachsenspiegel* に至ると、*ban* なる語は使用せられ

ては居てもそれは罰金を意味せず、之を科する権限の意に用ひられ、罰金を意味する語は *wedde* 又は *gewedde* の語に統一されてゐる。*ban* が單獨に用ひらるゝときには多く破門權を伴ふ教會的統制權を指し、國王の統制權又は裁判權等を意味する場合には多く *koniges ban* の語が用ひられてゐる。但し例外は在る。*Landrecht* 第一卷第五十三條第四項に於ける *bannes* は法王のものを指して居る。

(註一) His: *Geschichte des deutschen Strafrechts bis zur Karolina*. 1928, S. 102.

(註二) 77 參照。

罰金と身代金又は贖罪金との關係は、それ等が一括して科せられ、提供ありたる後罰金取得權者と贖罪金取得權者とが分數的割合(多くは 1:2。1:1 の所もある)に於て分割する方法と、全然別個に初めから各々の額を明示して科せられる場合とがある(註一)。*Lex Salica* の規定は多く前者に従ひ、*Sachsenspiegel* のものは多く後者を採る。*Sachsenspiegel* に於て *wedde*, *gewedde* 又は動詞 *wetten* は此意味に用ひられるが、他の場所では此語は罰金を伴ふ確約の意に用ひらるゝことのあることも、注意せらるべきである(註二)。

(註一) His: *ibid.* S. 96. Brunner: *ibid.* I, 1887, S. 164—5.

(註二) His: *ibid.* S. 102.

Sachsenspiegel は罰金の支拂に關し、支拂ふ側の身分に従つて、旗知行(*vanlên*)を有する諸侯は國王に百ポンドを、各地の

自由貴紳は將軍に十ポンドを支拂ふべきものと定め(Ssp.-Landrecht III, 64 § 2; § 3)、小前百姓 (bieregelden) は庄屋に對してハシリングを支拂ふべしとした(同條 § 8)。又一般人は國王に對し違法行爲に基かずして罰金を支拂ふ場合にはその額十ポンドとせられてゐる(同條 § 2)。但し、ホルシュタインやシュトマルンやハーデルンの如く特別の定を有する地方もある(同條 § 3)。國王の統制權に基く場合なるや否やに従つて、若し之に基いて裁判集會が行はるゝ場合には、その權限を帶ぶる守護 (grêve) 竝に代官 (voget) には六十シリングの罰金が支拂はるべく(同條 § 4)、同様な王都守護 (palanz grêve) 竝に地方守護 (lantgrêve) にも同額が支拂はるべきものとする(同條 § 6)。然し國王の統制權を帶びず自分自身の力によつて裁判集會を主宰する邊境守護 (markgrêve) には三十シリングが支拂はるゝのみであり(同條 § 7)、同様な立場に在る代官には三シリングが支拂はるゝのみ(同條 § 9)。守護代 (gogrêve) には六プフェニヒ又は一シリングが(同條 § 10)、百姓代 (bûrmeistere) には六プフェニヒが支拂はれる(同條 § 11)。

以上の *Sachsenspiegel* の規定を見ると、國王の統制權・命令權の系統を引いたものと *fredus* 的なものが、或場合には結合し或場合には單獨で存在してゐたことを知るのである。唯前代の *fredus* とは、贖罪金の額によつて罰金の額が上下せず一定してゐる點が、大いに異つてゐることに注意せらるべきである。

結 語

上來說述したる身代金・贖罪金等の計數は甚だ區々であり、一見何等統一なきものゝ如くであるが、それ等の法律は今日の如き參照法に非ずして記憶法たりし關係上、必ず何等かの簡單なる原則の上に立つてゐた筈であるとは、何人も考へ及ぶ所である。これに關して Brunner は夙にその著獨逸法制史に於て説明を加へ、古くは十二進法 Duodezimalsystem が本來であり、その倍數又は分數等が具體的な個々の定であつて、それが後に十進法 Dezimalsystem に變じたとしてゐる。そしてその原因として貨幣制度の變更を擧げることは容認し難いとし、寧ろ身代金の分割に際して用ひられた十進法が一般化したものとしてゐる(註一)。

(註一) Brunner: Rechtsgechichte II. S. 608—9.

身代金と贖罪金との關係は Lex Salica 以下 Lex Saxonum に至る迄のものに於ては非常に薄く、Sachsenspiegel に至ると非常に密接となり、人の身體傷害の場合に後者は前者の分數を以て定めらるゝに至つて居ることは、嘗て述べたる所である(31頁參照)。但し Sachsenspiegel に於ても盜罪等の財産犯に關しては身代金と直接の關係が無いことも既に觸れた(59頁)。よつて此處に問題として残る事は、Lex Salica の財産犯に關して認めらるゝ拒絶贖罪金と贖罪金竝に價額賠償との關係、之を

一般化して定額賠償と實損賠償との併存の能否の問題である。

Lex Salica の中で盜犯等に關し認めらるゝ拒絶贖罪金 (dilatatura) はその性質は明瞭でないが、恐らくは Brunner の言ふが如くに、盜犯を直ちに自白せずして不必要なる時間・費用・努力等をその決定に就て要せしめたることを理由として科せらるゝものであると考へられる(註一)。又 Lex Salica は此 dilatatura を認むる場合には殆んど常に capital なるものを認めてゐる。即ち價額賠償である。これは盜品等が返戻されゝば支拂はるゝことを要せず、その不可能なる場合にのみ科せらるゝならば容易に首肯し得るが、それ等の外に更に加へて科せられてゐる贖罪金は然らば何であるか、如何なる性質を有するかと問題となる。考ふるに、これは一面物品が回収し得ざりし間被害者の受けたる種々の不便苦痛を癒し、他面盜犯防止の爲の刑罰的作用を營んでゐたと思ふべきである。Sachsenspiegel に於ても、その Landrecht III, 47 § 1 に於て、竊盜又は強盜の手段によつて取得せられたる物は返還せらるべく、若し返還し得ぬ旨を誓ふ者があれば喪失者の評價に従つて代價を支拂ふべし、孰れの場合にも贖罪金が別に附加せられると定めてゐる。尤も評價が不當なりと思惟する者は宣誓によつて減額を要求することが出來た。

(註一) Brunner: ibid. II, S. 626.

Sachsenspiegel は又、その Landrecht II, 47 § 1 に於て、他

人の畠や牧場に自己の家畜を故意に放牧したる者は、損害を賠償するの外に三シリングの贖罪金を支拂ふべき旨を定め、同條 § 2 に於て、放牧が故意に基かざるときには損害を賠償する外には各家畜につき六ブフェ=ヒを支拂へば足るとしてゐる。即ち六分之一にて足るとしてゐるのである。又、同上 II, 46 § 4 は、既に播種してある他人の耕作地を不法にもうなひ起す者は、贖罪金の外になほ損害を支拂ふべきものとしてゐる。更に、同上 III, 86 § 2 竝に 87 §§ 1—2 は、管轄裁判所以外の裁判所へ訴訟を爲したる者は、所轄裁判所へ罰金を支拂ひ、相手方へ贖罪金を支拂つた上、なほ損害を賠償する必要があるとしてゐる。

以上を要するに、獨逸中世に於ては定額賠償が主であり實損賠償は寧ろ補助的地位に於て認められ、而も一個の違法行爲から、裁判權者即ち部分社會又は領主に對する罰金と相手方に對する贖罪金定額と實損賠償金との三者を同時に生ずることが相當多く認められてゐたことを看取し得る。又人命犯・傷害犯に於けると財産犯に於けるとは、賠償制の建前を多少異にしてゐたことも之を知り得るのである。斯くして獨逸中世は、今日の實損賠償制の時代たると對比すれば、之を定額賠償制の時代であつたと稱しても敢て過言ではない。(一九三九、六、二〇)